
IS ~ 『桐生』の名を継ぐものよ

山寺獄寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS『桐生』の名を継ぐものよ

【Nコード】

N2799T

【作者名】

山寺獄寺

【あらすじ】

もし一夏がISを嫌いだったら？そんなことから書き出した小説です。

稚拙な文章ではありますが楽しんでいただけると嬉しいです。

プロローグ（前書き）

四作目の投稿となります。が、主にこの作品を中心に投稿していると思います。定期更新してまいりますのでよろしくお願ひします。

プロローグ

16年間の短い俺の人生を変えた体験は3つある。1つは『IS』という馬鹿げた兵器が生み出されたこと。1つはIS学園に入学させられたこと。そして最後、俺に生き方を教えてくれた大切な親父

桐生 一馬に出会ったこと。

……

……

少し昔話をしよう。俺には姉が『いた』。少し気が強くて、不器用で、それでいて優しくかった姉。そんな姉と二人だけの生活は楽しかった。両親はいなかった。俺が幼い頃に蒸発したらしい。正直今は何をしているのか気になりもしない。顔すら思い出せないような相手だ。血の繋がった他人といった感じだ。

金もない。唯一、雨風の凌げる家があっただけ。姉は家事というのが全く出来ず、俺は強制的に主夫のようなことをさせられていた。今はもう慣れてしまっているが、当時は大変だった。

それでも俺は幸せだった。俺は笑顔だった。姉も楽しそうに笑っていた。

そんな薄っぺらな幸福は一つの発明によって粉々に崩れ去った。

IS インフイニット 正式名称は ストラトス Infinité Stratos。

宇宙空間での活動を目的として作られたマルチフォーム・スーツだ。

開発者は俺の幼馴染の姉、篠ノ之^{のの}東^の。自分の身内にしか興味を見せないような社会不適合者だった。本来、世界から弾き出されるであろう狂人は、その発明を以って世界を自分に適合させた。『白騎士事件』と呼ばれる自作自演の演出によって、ISは兵器として注目されるようになった。俺に言わせればアホらしいの一言に尽きるが、それでも世界は篠ノ之 東の存在を受け入れた。いや、受け入れさせられた。

結果として姉は世界最初のIS操縦士として世界に知れ渡り、織斑^{おりむら}の名を世界に知らしめた。

そうなれば、当然忙しくなる。ISの第一人者であることで富を得て、俺達の生活は一転した。切り詰めていた生活が段々と余裕が生まれ、毎日の食事に苦勞することもなくなった。

と、同時に姉が家に帰ってくる事が少なくなった。はじめは仕方ないことだと納得していた。姉は当時から世界で一番有名な人だった。だから、忙しいのだと、幼いながらも我慢していた。それでも家を守るのは俺の仕事だと早熟した思考で姉が帰ってくるであろう家を守り続けた。帰ってくるかも分からない姉のために晩御飯を用意して、翌朝それがなくなっていてキッチンの流しに空の皿が置かれているかに一喜一憂し、脱ぎ捨てられた服を洗濯し、片付けが苦手な姉のために掃除もした。『家を守りたい』という漠然とした願望から幼馴染の通う剣道場に通い、剣道を習った。

そんな生活を何年か続けて、俺は逝き付いた。気付いてしまった。姉が家を空ける日数が増え、冷え切った食事が無造作に置かれ続け、たまになくなっていてると思えば、食事はゴミ箱に捨てられているだけで。

何のために俺は家を守っているんだろう？

そんな疑問が胸をキリキリと締め付けた。

「お前が家のことをやってってくれるから私は安心して外に出られる」

姉が言った言葉。それは押し付けじゃないだろうか。自分がやりたくないことを俺に任せて、自分は外で楽しんでるんじゃないだろうか。

考えて考えて考えて考えて、諦めた。

姉のために家を守るのはやめた。ただ、自分のために家を守っていた。ゆつくりと俺と姉の間に亀裂が入り始めたのは、その頃だった。そうなってしまうえば簡単だった。姉の分の食事を用意するのをやめた。洗濯と掃除は自分のために続けた。ほとんど帰ってこない姉なんかのためではなく自分のために。そして幸せだった自分達の仲を引き裂いたISを憎んだ。姉を家から遠ざけたISを心のそこから憎んだ。憎んで憎んで、ISなんてなくなってしまえと呪い続けていたが、世界は俺の思いを裏切ってISに傾倒していった。

女性にしか扱えないという欠陥があったにも関わらずISは世界を席卷した。結果として女性上位の歪んだ世界を生み出してしまった。その頃にはISも姉もどうでもよくなった。自分には関わりのない話だと割り切っていた。けれどISという怪物は俺をどん底まで叩き落した。

21の国と地域が参加してISの技術を競う世界大会『モンド・グロツソ』。その第二回大会。姉もそれに参加するつもりだった。

しかし、その当日に俺は誘拐された。俺を人質に姉を大会に参加させないようにするためだったらしいがそんなことは興味がない。まあ、そんなことを細かく説明するのも面倒くさい。

だから、事の顛末だけ言っておこう。俺はとある男に救われた。銃器で武装する男達を素手やその場にあった物で殴り倒し、単身で自らは傷つきながらも俺を助けてくれた男性。その大きな背中を俺はこれからも忘れないだろう。

そして、そこに遅れてやってきた姉はそのヒーローを誘拐犯と勘違いしてISを装備して攻撃してきた。それを止めようと間に割って入った。

今でも思い出す……鬼のような形相で手にする日本刀のようなものを振り下ろす姉、そして俺の身体を縦に蹂躪した殺意の剣先を。

無謀だったのは理解している。けれど、俺を助けてくれた、まるで漫画の世界のヒーローを攻撃しようとする姉が許せなかった。

その一撃は男には届くことはなかった。けれど俺の身体には決して癒えぬ傷を残した。

男は僕を助けたそうとした際の傷で第一線を退き、姉はモンド・グロツソに参加出来なかった。

そこにいた全ての人が何かを喪った。

俺は尊敬する親父

桐生

一馬

に出会い、右目を喪った。

プロローグ（後書き）

最初の最初ですが、桐生さんの名が出せたのでよかったです。
桐生さんで分かると思いますが『IS』と『龍が如く』のクロスに
なっております。

プロローグ2（前書き）

出来るだけ短いスパンで投稿させていただきました。

プロローグ2

昔のことなんてするもんじゃないな、と内心溜息を吐きながら、車の中から見える風景を桐生きりゆう 一夏は呆然と眺めていた。ひたすらに続く道路、変わり映えない自然の光景は今のどんよりとした感情を更に混沌としたものに沈めてくれていた。今は、IS学園へ向かう途中だった。今日から学校の初日が始まるにも関わらず、一夏の心は決して晴れることはない。落ち着こうと、一夏は右目の眼帯を二度指先で触れるように叩いた。

「それにしても、ようあんなトコに行く気になったのう、坊ポン。なんやったかの、ア、IS学園やったか」

一夏の内心を知ってかどうかは分からないが一夏の隣に座っていた男がワザとらしい関西弁で一夏に話しかけてきた。時代遅れのテクノカットに左目の眼帯がトレードマークの真島まじま 吾郎ごろうだ。蛇柄のジヤケットに黒のタイトなズボンに身を包んだ彼はどこまでも明るかった。

「まあ、成り行きかな。それにしても真島の兄さんが態々、付いて来てくれるとは思わなかったよ。どういったつもりで？」

真島の言葉に一夏は忌々しげに頬を歪めた。正直、ISには関わりたくはない。しかし、それを世界が許さなかった。藍越学園と間違えて行ってしまったアイエスアイエス学園の入試会場でISを起動させてしまったからは、男で唯一のIS操縦者として大々的に発表され、逃げ場はない状況だった。どうせあの天災の仕業だと一夏は判断している。そんな顔の暗い一夏の問いに真島は無邪気に笑っていた。

「そら、IS学園ついたら、女の園やないかい。目の保養うちゅうやっっちゃ。神室町の姉ちゃんもいいが、偶には可愛らしい女の子も見たいやないかあ」

これが本心なのかすら判断がつかない。真島はふざけた調子で本心を語る男だから。真島のことか未だに分からないと一夏は苦笑するしかない。一夏の乗る黒塗りベンツを困うように同じような車が何台も走っている現状を考えると、その余裕も分らないでもない。この場合はここまでの見送りが行われる一夏の人望を褒めるべきか。実際のところ、そんな陽気な真島の姿に一夏は感謝していた。もし、自分一人でIS学園に向かっていたら、今頃どれだけイライラしていたか分からない。それを心配してくれたのか、先程の言葉が本心なのかは分からない。それでもこうやって当たり前のように自分の隣で笑っている真島のことを一夏は慕っていた。

「そろそろ到着しますよ、若」

今まで静かに運転していた黒のスーツに身を包んでいる男がそう伝えてきた。その言葉に我に返った一夏は辺りを見回した。さっきまでとは一転して都会の町並みに変わっていた。前を見れば、遠目ではあるが巨大な門とその奥に聳える城のような建物。IS学園だ。それを確認すると一夏は目を閉じた。

『IS学園には元姉である織斑おりむら 千冬ちふゆがいる』

そう、先日電話で「サイの花屋」から聞かされていた。

この三年間でISとの関係を断ち切ろう。これ以上ISに振り回されたくはない。

そう決意して目を開けたと同時にゆっくりとブレーキがかかり、一

夏を載せた車が止まった。

前の席に座っていた若い衆二人がすぐさま車から降り立ち、一夏と真島が座る後部座席のドアを開けた。

「ありがとう」とだけ応えて一夏は車から降りる。

刹那

「クツ」

大量の視線が一夏へと刺さる。好奇と奇異の感情が臆面もなく一夏たちへと降り注ぐ。確かに覚悟はしていたが、ここまでか。イライラする。ISが開発されてから女性上位の風潮が生まれた。それは仕方ない。しかし、それが一般人まで浸透するのは異常だ。全ての女性がISを扱えるわけではない。にも関わらず、全ての女性が上位にいるかのように振舞う。それがどれだけ異常なことか。それもこれもISが原因だ。そしてここにいる生徒も教師もそんな風潮の最前線に立つアホどもだ。

問題が起きないわけではない。

だからこそ、この大所帯だ。校門の前に立つ一夏の前には数台のベントツから降り立った黒のスーツに身を固めた組の若い衆がずらりと並び、その一歩前に真島が悠然と立っていた。明らかに堅気ではない連中だ。一瞬で視線が強まるが、それが狙いだった。一夏に手を出す。それがどんな意味があるのか、それをこの一瞬でIS学園中に刻み付けたのだ。一夏の右目の眼帯　そこに金色に輝く堂島組の紋の意味

「んっんん……桐生ちゃんからの伝言や」

真島が何度か咳払いをして、そんなことを言った。その瞬間、周りの空間がシンと静まりかえった。風によるざわめきも消え去り、真

島の言葉を待つかのように空気が落ち着いた。

「『前にすすめ。お前のケツは俺が持つてやる』 愛されとるのオ、坊」

「本当に、俺にはもつたいない親父だよ」

親父である桐生きりゆう 一馬かずまとはISが扱えることが世界に認識されてから何度も話し合った。一夏がISと関わりあいたくないことを知っていたからこそ一馬は心配し、一夏の姉である遙はるかは反対した。一夏も考えに考えた。このまま逃げることも可能だっただろう。けれど、『桐生』の名を持つ人間として逃げるわけにはいかなかった。一馬の息子として無様な姿は見せられない。だから決意した。前にすすむと

「家を 家族をお願いします」

「安心せい、坊。『アサガオ』の連中は俺らが守つたる」

一夏は苦笑して否定した。

「『アサガオ』のこともありますが、俺はここにいる皆も組の奴らも、そして真島さんも家族だと思ってます。だから、身体に気をつけてください。皆に何かあれば俺も、遥姉さんももちろん親父も悲しみます」

一夏の言葉に真島は「は、」と一瞬間抜けに声を漏らし、その後隠そうとせずに声を上げて笑った。周りの連中も嬉しそうに微笑む。

「不肖、東城会直系真島組組長・真島 吾郎、必ず家族を守らせていただきます、若」

晴れ晴れとした表情で深々と頭を下げた。合わせて周りも礼をする。

「「「いつてらっしゃいませ、若！」「」「」

「ああ、いつてくる！！」

皆の言葉に満足して、一夏も笑んで頷くと、颯爽と振り返り校門の内側へと進んでいった。

送り出す真島と男達は一夏の姿が見えなくなるまで、頭を下げ続けていた。

プロローグ2（後書き）

真島の兄さん大好きです！！正直一馬さんよりも……

真島さんが出せて満足です。ちょっと口調が合っているか不安ですが

ご意見・ご感想お待ちしております。

第一話『過去との再会』（前書き）

定期更新継続・・・だトッ

ご意見ご感想お待ちしております

第一話『過去との再会』

今の一夏の状況を表現するのに最も適した言葉は「客寄せパンダ」だろう。1年1組 入学式の一週間前に届いていた書類に書かれていた教室には特に問題もなくやってこれた。迷うかも、と思っていたが、案内もしつかりされていたため特に迷うという事態には陥らなかった。しかし、さっさと教室に入ったら入ったで問題があった。見送りの時間も考えてくれたからか、教室に入ったのはHRの20分前という優等生振り。そこまでは問題なかった。むしろ一般的には褒められる部類だ。けれど一夏は早く来てしまったことを後悔していた。

「はあ、どいつもこいつも気にいらねえ……」と周りの馬鹿共に聴こえないように口の中だけで呟いて舌打ちした。少しぐらい気骨のある奴がいると思っていた。ISなんてくだらない物は関係なく意志を持って高みを目指すようなそんな人間が。そんな強者の存在を一夏は少しだけ、ほんの少しだけ期待していたのだった。歪みきったこんな世界でも一本筋の入った人間を。

なのに一夏に注がれる視線の多くは好奇と侮蔑だった。それだけで一夏にとってこれからの三年間が終わりを告げた。とにかく、くだらない三年間を適当に過ごして、ただ、自分の鍛錬だけに力を入れようと心に誓った。そんなことを考えていると一人の女性が教室へとやってきた。女性としては短めの碧髪に眼鏡を掛けた温和、いやどことなく抜けてそうな女性だった。彼女はのんびりとした足取りで教室の前 教壇に立った。

「皆さん、入学おめでとう!!」

シンと静まり返った教室。今や教室の注目は目の前にいる気弱そう

な教員ではなく、教室内、いや学園内唯一の男　一夏へと注がれているのだから仕方がない。一方の一夏は教員の到着に安堵した。ようやくまともな人に会えたから。好奇ではなく、一人の生徒として接してくれそうな教員に、まっすぐ視線を向けていた。

そんな中、何度か一夏に対して視線を送る少女がいた。教壇の真ん前に一夏とは離れた窓際の席にその少女は座っていた。凜とした姿で深く腰掛ける茶色の混じった長髪を後ろで結んだポニーテールの少女。その姿は一抹の武士を思わせた。そんな彼女は好奇とも異なる複雑な表情で一夏を眺めていた。その視線を一夏の方も気付いてはいた。どこかで視たことのあるような感覚を覚えていた。しかし、ここで彼女に対してアクションを起こすのは躊躇われた。彼女が知り合いだったとして、おそらく一夏が傷を負う前にあっているはずだからだ。あの頃とは全く違う、変貌してしまったと言ってもいい自分を見せてしまうのが辛かったのもある、しかし一番の理由はあの頃のままの姿を幻想されたくはなかったからだった。

「私は副担任の『山田 やまだ 真耶 まや』です」

生徒達は全く反応を示さない。唯一、一夏は小さく会釈したが、こんな閑散とした雰囲気の中、真耶がそれに気付いてはいなかった。彼女自身、返事をくれるだろうと予測していただけに拍子抜けしている。それでも教員らしく気を取り直して、話を続けていく。

「今日から皆さんは、このIS学園の生徒です」

彼女の右肩辺りに電子音を発して現われたモニターは彼女の言葉に合わせて学園の外観の映像を映し出していく。ISが生まれる前までは漫画やアニメの世界だけの存在だったモノ。今では当たり前前のモノになってしまったが、一夏としてはそれだけは感謝していた。ISにはではない。ましてふざけた天災にでもない。ISというくだ

らないガラクタから、日常に密接した宝物を見つけてくれた名も分からぬ科学者に、だ。そんな人こそ賞賛されるべきではないだろうか

「織斑君、織斑 一夏君」

世の中の歪さに苛立ちを感じていた一夏は不意の呼びかけにハッと我に返った。

「は、はい！」

当然のことなので驚いて声を上げると周りからはクスクスと笑い声が聞こえた。

「あのー、大声出しちゃってごめんなさい。でも……『あ』から始まって、い今『お』なんだよね。自己紹介してくれるかな？ダメかなあ？」

申し訳なさそうに手で謝りながら状況を説明してくれる山田先生。自己紹介なら仕方ない。そう考えて山田に向かって「ちゃんと聞いてなくて、すいません」と謝罪して一夏は立ち上がった。そして周りを一度見渡した。

やはりそこにあるのはただの興味の視線だけだった。

「山田先生。先に言うておきますが、俺は何年も前に織斑から桐生に姓を変えています。正式な手続きを踏んでいますので学校側の書類に不備がある場合は教えてください」

あの事件後、一夏は姉の下を離れた桐生 一馬のが園長を勤めている孤児院『アサガオ』へと入所し、養子という形で姓を桐生へと変

えた。それなのに織斑と呼ばれたことに違和感を覚えた。願書にも合格通知にも桐生と書かれていたのに、この場で織斑と呼ばれることはあまりにも不自然だった。事実、俺が呼ばれたと同時に現われたネームプレートには織斑の文字。一瞬だけ思考して導いたのは「あの馬鹿が関わっているのだろう」ということ。電子の世界では頂点に君臨する彼女ならば学園のサーバーに侵入して弄る事ぐらい造作もないことだろう。変に声を荒げるのも馬鹿らしかったのでそれだけ伝えて一夏は口を開いた。

「『桐生 一夏』です。ISには微塵も欠片も興味はありませんが、どっかのバカ女のおかげで強制的にこの学園に入学することになりました。将来的にISのようなゴミに関わろうとも考えていません。高校が卒業出来ればいいです。皆さんとも必要以上に仲を深めたいとも思いません。この3年間だけにはなりますが、よろしくお願いします」

その言葉で教室内の空気が冷え切った。当然だ。ここはIS学園なのだから。先程までおおらかな視線を向けてくれていた山田ですら冷たい目をしていた。

「おまえは何を言っている!?!」

座ろつと下を向いていた一夏に覆いかぶさるように影が掛かった。威圧感にとつさに右手を頭上に掲げると手の平に衝撃と共に鈍い痛みが走った。

そのことに特に同様もせず、攻撃を仕掛けてきた相手に目を向けると、そこにいたのは

「ああ、ご無沙汰しています『織斑』先生。二度と会うつもりはありませんでしたが天災のおかげで、もう一度会う機会が出来たこと

を嬉しく思います」

忘れるはずもない。漆黒のストレートな髪。切れ長の黒い瞳。理不尽なほどの威圧感。一夏の元姉、織斑おりむら 千冬ちふゆだった。

「久しぶりだ、と返しておこう。」

それよりお前はどっとうつもりだ」

「どっとうつもりもないですが。言葉の通りです。勉強を怠るつもりはありません。ISに関わらないという選択肢もないことも理解していますよ。……“この眼”のおかげでね」

切れ長の目を更に細めて睨んでくる千冬の殺気に飄々と返しながら、右目の眼帯をトントンと指先で叩く。その眼帯をみて、千冬の表情が僅かに歪み、一夏の視線から逃れるように目だけを下に向けた。

「俺はISとの絡まった呪いをこの三年間で断ち切るためにココに来ました。それを忘れないようにお願いします。そんなことより、よく俺の前に現われる気になりましたね。この原因を作った貴女が、しかも未だにIS関係に携わっているとは 正気を疑います。そんなにも今の地位が惜しいですか？ 第一回モンド・グロツソ優勝者さん」

一夏の瞳、そして言葉に滲み出る感情を理解した人間がこの教室にどれだけいるのだろうか。そこにあるのは明確な拒絶、断罪、そして侮蔑だった。何故、未だにISに関わっているのか、それは一夏が「千冬がIS学園の教員として働いている」のを知ってからの疑問だった。

結局のところ、彼女もまたISに魅了されたバカな女の一人だったというだけの話か。

そんな風に結論付けて深い溜息を一つ吐いて、一夏は何事もなかったかの様に席に着いた。

もう興味は尽きた。答えも要らない。千冬の自己紹介に沸きあがる黄色い歓声も一夏には届かない。

「織斑 千冬さん。貴女はそこで止まっていればいい、逃げていればいい。俺は 『桐生 一夏』 は前に進みます。前に進む意味を貴女からではなく、親父から学びましたから」

一夏の決別の言葉は誰にも聞こえない。

さっきまでの静寂は終わり、もう誰も一夏を見ていないのだから。

第一話『過去との再会』（後書き）

（NG集）

3ページ目後半より

一夏の瞳、そして言葉に滲み出る感情を理解した人間がこの教室に
どれだけいるのだろうか。そこにあるのは明確な拒絶、断罪、そし
て侮蔑だった。何故、未だにISに関わっているのか、それは一夏
が「千冬がIS学園の教員として働いている」のを知ってからの疑
問だった。

結局のところ、彼女もまたISに魅了されたバカな女の一人だった
というだけの話か。

そんな風に結論付けて深い溜息を一つ吐いて、一夏は何事もなかつ
たかの様に席に着いた。
もう興味は尽きた。

ココからNG

千冬は逃げるように教室から出て行った。その後姿を慌てて追いか
ける山田。

教師が誰もいない教室にはどよめきが波紋のように広がり、一夏へ
突き刺さるような怒りが浴びせられる。
関係ない。

……

……

あまりにダークになりすぎたのでやめました。てか、逃げ去る千冬の姿が想像できなかった。

それにしてもまだ2話しか投稿してないのにアクセス数が1万超えるとはッ！！！！

正直、予想外デス

まあ、ISの力という風に納得しています。そうしないと確実に調子乗ってしまうのでwwwwww

さて、話は変わりますが、一夏のISについてアンケートを取りたい、というかご意見をいただきたい！！
とある方から感想のほうで「ISの武器は村正かドスなのかな？」
という意見をいただきました。

その考えはなかった！！

というわけで一夏の専用ISの武器について意見をいただきたい！！！！

ちなみに、作者は無手で戦えるように右手に紅蓮式式のよつな籠手を装備させようと考えていました。

というわけで

- 1、作者の好きにしなよ（無手・籠手コース）
- 2、極道の刃物はドスに決まっとるやろっがッ
- 3、それ以外

よろしくお願いします。

ー夏のISの名前も募集します

第二話『傲慢たる弱者』（前書き）

流石に毎日更新とはいきませんが、このペースでどんどん投稿していきます。ご意見感想をお待ちしております。

第二話『傲慢たる弱者』

一夏が元姉への断罪を吐いてから幾ばくかの時間が過ぎた。教室内も何とか落ち着き始めた休み時間だった。

「……………ちよつといいか？」

一夏は不意に声を掛けられた。ヤル気のなさに突っ伏していた一夏だったが、流石に声を掛けられては仕方がなかった。重たい身体を持ち上げ、声の主へ視線を向けると、先程から何度も自分のことを気にしていた少女だった。

「ん？」

やはり見覚えがあるのだが思い出せない。とはいえ知り合いである以上、無下には出来ない。

「ここはうるさいから屋上でも良いか？」

休み時間ということもあり、廊下から一目一夏を見ようという輩が大量に釣れていた。こんなところでは話を出来るような状況ではなかった。それを理解してか、少女は無言で頷くと足早に教室を出て行った。

それを確認してから、一夏も気だるげに立ち上がると、一度だけ伸びをして後を追う。
それにしても

「誰だっけ……………」

全く思い出せていなかった。桐生になつてからの生活が新鮮で充足していたからか、それ以前の記憶が薄れているのだつた。とはいつても全て忘れてしまつてゐるわけではない。天災、篠ノ之 束やその妹

「ああ、篝かッ」

ようやく思い出せたのか、ポンと手を叩く一夏。篠ノ之 篝 一夏の幼馴染にして一夏が最も憎む相手の妹。一夏が小4の時に引越して以来会つていないのだから実に6年ぶりの再会。思い出せないのも無理はない。

「確か去年、剣道の全国大会で優勝したのもアイツじゃなかつたか」

昔は家で過ごすことが多かったため、世界の情勢に疎かつた。それを治そうと、一夏は新聞を読むようにしている。そのときに確かに小さな記事だつたが、篠ノ之 篝の名を確認したはずだ。そのときは気にしなかつたが、言われてみれば彼女の動きは武道経験者らしく体幹がしっかりしていて、隙がない。あくまで一般人にしては、ではあるが。

「久しぶりだな……」

屋上は風が澄んでいて気持ち良かった。篝は落下防止用の柵に手をのせ、校庭の方を眺めていた。

「あ、ああ……」

どことなく居心地が悪そうに見える篝。目も合わせずに、返事を返した。会話が續かない。一夏は別段気にはしないが、何か言いたそ

うな箒の姿を見て溜息を一つ吐いた。

「そういえば、去年剣道の全国大会で優勝したんだっただな。おめでとっ」

話のきつかけになるだろうと思い、そう言つと、箒は目に見えてうるたえだした。

「なッなぜ知っている!？」

「新聞で読んだのさ」

「なぜ新聞など読んでいるッ!？」

酷い言われようだと一夏は苦笑した。

「ま、落ち着け。で、何か言いたいことでもあるんじゃないのか？」

その言葉にハツと落ち着きを取り戻した箒は頭を何度か振って、決意したのか口を開いた。

「一夏 この6年間にお前に何があつた。私がいた頃はそんな眼帯などしてなかったし、そんな冷たい目をしていなかったぞ!!」

箒は声を荒げながら反転して、一夏の顔の右半分を覆うような眼帯を指差した。その言葉に一夏の顔がクシヤリと歪んだ。

「お前が知ってる『織斑 一夏』は死んだんだよ」

眼帯を右手で撫でながら、一夏はすっかりした口調でそう言った。

「なッ何を」

「俺は桐生 一夏だ。それ以上でもそれ以下でもない。この眼帯は俺が桐生である証ってトコかな」

これ以上は話せないとはかりに、一夏は口を閉ざしてそのままの足取りで元来た道を戻っていく。

「なにが、あつたんだ、一夏……」

筈は見てしまった。去ろうとする寸前、一夏の顔が悲しみに歪んでいるのが。全ての感情が交じり合って生まれた黒、そんな悲しみを瞳に滲ませた一夏の表情を。

そんな二人をよそに屋上に流れる風は草木の緑の香りを乗せてのんびりと時間だけが過ぎていった。

……

……

次の時間、早速と書いていいのか運悪くと言うべきか登校初日というのに授業が本格的に始まった。クラスメート達はどことなく「何を当たり前のことを説明しているんだ」という風な表情だった。一夏も一応一通り読んで理解はしている。と、言うより世界でISを最も理解している人間は一夏だった。はっきり言おう。一夏は他の

誰よりも、ISの産みの親である篠ノ之 東より（・・・）もISのことを深いレベルでISを理解しているのだ。同時にここまでISを憎んでいる人間も一夏以上にはいない。本心から言えば、ISを全て壊してしまいたい。けれど、同時にそれは一夏の『死』を意味していた。

そのことに悩みに悩みぬいた結果、今一夏はこの場所にいた。

「桐生君、何か分からないことはありませんか？」

男で唯一のIS操縦者である一夏、更に今までそういったモノに触れる機会がなかっただろうと、心配して山田がそう声を掛けてきた。理解できていないことはないが、そういうフオーローをしてくれる山田に対しては一夏は少しばかりの尊敬の念を抱いていた。ただ、男だからと奇異の目で見るではなく純粹に教師として接してくれることに感謝していた。

「ありがとうございます。今のところ分からない所はありません。大丈夫です、山田先生」

だから、一夏は静かに笑って礼をいった。尊敬できる人間には最大の礼をもって接するのが一夏の中に染み付いた教えの一つだから。その分、敵には一切の容赦をするな、なんて教えも存在するわけだが。

「ッそうですか、良かったです。また、何か分からないことがあったら、訊いてくださいね」

山田は、一夏の歳相応のそれでいて礼の籠った笑みに一瞬驚いていたが、一夏に笑みを返して教壇に戻っていく。

「桐生、『コア・ネットワーク』について説明してみろ」

千冬からの問いかけ。教師としては間違っていない。分かるとそれを知識として利用できるかは別物であるから、それを確認するためにはこういった質問をするのは教師として、まさしく正しい。しかし、この千冬からの問いは一夏の内心を強く荒立たせた。

この女はどこまで他人を下に見るのだと、怒りが溢れてくる。初めてISを乗りこなした自信か、それとも自分の強さに対する誇りか。強さなど決して普遍ではないのに。

そんな怒りを隠そうともせずにぞんざいな態度で一夏は立ち上がった。

「『コア・ネットワーク』はISのコアに内蔵されているデータの通信ネットワークのことです。」

現在は兵器運用なんてくだらない使われ方をしている結果、操縦者同士の通信機器としてしか使われていませんが、ISは本来宇宙空間での運用を目的に開発されました。そのため、広大な宇宙での相互位置確認や情報共有が目的です。

また、ISコア自体がお互いに情報共有することで、自己進化していることも確認されています。

以上でよろしいでしょうか、織斑先生」

「構わん、座って良いぞ」

織斑の方も特に気にした様子もなく一夏を座らせた。こういった態度も一夏の嫌いなところであった。

「ココまでの知識は今現在求めはしない。しかしお前達はISを学びに此処に通っているはずだ！！ 猶予は少ない。日々の努力を決して忘れるな！！いいな」

「「「はい!!」「」」

何というか現金なものだと一夏は呆れ果てた。たったコレだけの問答で一夏に対しての視線が尊敬へと変わるのだから。まあ、仲良くしたいわけでもない。適当にあしらっておこうと心に決めた。

その後、授業は特に問題なく終わった。むしろこんなところでもつまずけば、確実に落ちこぼれのレッテルを貼られてしまうだろう。いまは、休み時間になっている。未だに話しかけようかかけまいかと遠巻きに一夏を眺めている連中が大多数だった。一夏は慣れてしまったのか特に気にした様子もなく、持っていたシャーペンを適当にくるくると廻している。そんな中

「ちよつとよろしくて?」

「あ?」

近づいてくる気配には気付いていたが、気にも留めていなかった一夏は話しかけられると、若干間抜けな返事を返した。

「まあッ!!何ですの、そのお返事!!私に話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度があるのではないのかしら?」

ウェーブの掛かった金髪の少女は一夏の態度が気に入らないらしく、見下した目でそんなことを吐いた。

「悪いが、他人を見下すようなバカに尽くす礼儀なんか持ち合わせちゃいないんでね。偉ぶりたいなら、どっかその辺のバカを相手にやってくれよ。」

てか、誰？」

一気に一夏の視線が鋭くなった。ISが誕生してからの女性上位の典型的な女だったこともあって、自然と口調も悪くなった。

「何ですかその失礼な態度は！！しかも、私を知らない！！？」

『セシリア・オルコット』を！？

イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私をッ！？」

顔を真っ赤にして声を荒げる彼女　セシリアは憤りのあまり一夏の机を叩いた。

『代表候補生』　国家ごとに存在する国を代表するIS操縦者の候補生のことである。IS操縦の技術に優れたものが選ばれ、エリートともいえる存在だ。ただ、あくまで候補生ということもあって、体のいい実験体という面も存在する。

「ハッ、候補生ごときで調子に乗るお嬢様を覚えてられるほど頭の出来は良くないんだ。悪かったな」

「な、無礼にも程がありますわ！！この国の男性はこんなにも下品なのですか！！誇りある貴族の私に　」

肩を震わせて怒りをあらわにするセシリアの言葉を一夏は遮った。

「『誇り』なんて言葉をお前みたいなガキが口にするな。お前のそれは『誇り』じゃない、単なる『傲慢』だ。

お前のやっつてゐることはお菓子をおねだるガキと何ら変わりはないぞ。それ以上、『誇り』という言葉汚すな」

殺気を込めた視線でセシリアは一步後ろに下がった。聞き耳を立て

ていた周りの連中からも困惑の色が見て取れる。

「『誇り』ってのは語るもんじゃない。態度で、行動で、背中で、示すもんだ

そう、俺は親父に教わった」

顔を歪ませたままのセシリアをよそに興味をなくしたのか一夏は前に向きなおった。

「あ、あなたは」

予鈴が鳴った。何か言おうとしていたセシリアだったが、授業を妨害するわけにはいかず、不機嫌そうに拳を握り締めながら自らの席に戻っていった。

第二話『傲慢たる弱者』（後書き）

いかかだったでしょうか？楽しんでいただけたでしょうか。

一応、今回の話の中で作者が思う『誇り』について書かせてもらいました。龍が如くをプレイしていて、『誇り』は長年貫いてきた信念によって生まれるものだ、というのを一馬の背中を見て感じました。

実際、間近で一馬を見ていた一夏からすればセシリアの言葉は許せないものでしょう。ということでもかなりのオリジナル要素を織り込みながら書いてみました。少しでもこの作品内での一夏の一馬に対する信仰に近いレベルの憧れというのを感じていただければと思います。

さて、前回から行っているアンケートですが、皆様からの意見は『無手』と『ドス・日本刀』の二つに分かれてきました。中には龍が如く内に出てくる武器として使えるものは全て出したら？なんて意見もいただきました。

それ、なんて赤い弓兵？

専用ISを出すには何話か必要なのでアンケートを継続して行います。

一夏の専用ISの武装について

1、無手（籠手）

2、極道ならドスやる!!

3、その他

よろしくお願いします。引き続きIISの名前も募集しております。

責任と（前書き）

ちよつと不自然すぎるといふ意見をいただきましたので軽く手直しして再投稿

責任と

いろいろなことが起きたものの、IS学園初日は終了した。今は帰るために校門に向かっているところだ。本来、IS学園は全寮制なのだが、当然ながらそこに住んでいるのは女性ばかりだ。そのため、入学後一週間は自宅からの登校となっている。今は、個室の準備や男性用トイレの設置に奔走しているのだろう。

とは言っても、一夏の住んでいる『アサガオ』までは車で一時間以上掛かるような場所にあるため、通学には不向きだ。そのためホテルに一週間の間、宿泊しようと考えていた。

「仕方ない……花屋のおっさんか伊達さんに連絡取るとするか」

事前にホテルを取るつもりではあったが完全に忘れていたのだった。一応、学校の敷地内なので携帯は使えない。そのため、一夏は足早に校舎を後にしようと考えていた。

「桐生君　　! !」

下駄箱で靴を履き替え、玄関を出ようとしたところで後ろから声を掛けられた。今日一日で聞き慣れた山田先生の声だった。なんとなく嫌な予感はしたが、無視するわけにもいかず振り返ると、山田先生と織斑先生がこちらに向かって急いでいるのが見えた。正確には山田は走っていて、織斑はいつも通りの泰然とした足取りだったが、

「何でしょうか？用事があるので出来れば簡潔にお願いします」

若干息の荒くなっている山田先生には申し訳ないが時間はあまり残っていない。早く宿を決めてのんびりしたいというのが一夏の内心

だった。

「えっとですね、桐生君の寮の部屋が決まりました。」

少し落ち着いてきた山田先生の手には、部屋番号の書かれた紙とキーが握られていた。それを、有無を言わず押し付けるように渡してきた。

「俺の部屋はまだ決まっていないという話でしたが？前に聞いた時に、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

一夏が鍵を手の中で弄りながら尋ねると、言づらそうに山田先生は視線を下に下げた。

「それなんですけど、事情が事情なので一時的な措置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……そのあたりのことって政府から聞いてますか？」

どうやら政府、日本政府の指示らしい。妥当な案だろう、なんせ前例のない『男』のIS操縦者なのだ、国としても監視と保護の両方を兼ねているのだろう。しかし、急な部屋替えだ。他の生徒に確実に迷惑になっただろうに。

「一応確認しておきますが、一人部屋を用意していますよね」

今日から寮に住めというのなら仕方が無いので受け入れるしかない。しかし、女性だけの寮に男が入るのだから、それぐらいの措置はしているはずだ。

「そんな訳がないだろう。お前の部屋は篠ノ之と相部屋だ」

遅れてやってきた織斑が当然とばかりにそんなことを言ってきた。

「何を言っているのか俺には理解できませんが」

ありえない、といった感じで一夏はうろたえ始めた。

「上からの指示が急だったのな。お前と幼馴染である篠ノ之とならば」

「お断りします」

織斑先生の言葉を遮って一夏はそう言い放つと渡されていた鍵を山田へと返す。

「それだけでしたら俺は帰ります」

これ以上話す事はないとばかりに一夏は踵かかひすを返した。

「き、桐生君待ってください。これは政府の決定で」

「ああ、なるほど。上からの命令だからと、篠ノ之だから問題ないと」

そんなことを呟きながら一夏は振り返る。その顔は凍りついたかのような無表情で、それを見た山田の顔には怯えの色が強く張り付いた。

「あなた方は本当に教師ですか？」

一夏の言葉はあまりにも冷め切っていた。鋭い視線のまま、一夏は口を開いた。

「教師として、いや、人としてあなた方は最低です。俺が寮に住むのは分かります。全寮制ですし監視という意味もあるでしょう。ただ、一人部屋ではなく相部屋？正気ですか？付き合っているわけでもない男女を一つの場所にまとめる。それがどれだけ危険なことかぐらい分かるでしょう。俺は別に構いません。特に気のない女性に手を出すような下卑た思考は持ち合わせていませんから。しかし、相部屋になる女性の気持ちはどうなんですか。自室という落ち着ける場所に俺という異性が入る。おそらく気の抜けない生活になるでしょう。それがどれだけ相手にストレスを与えることか。あなた方が教師ならば上からの命令だろうと何だろうと断らなければいけないことでしょう。にも関わらず、それをせざるう事か俺に相部屋だが上の命令だから問題ないと言ってらっしゃる。それはあまりにも非情ではないですか？」

彼女達は答えない。いや、応えられない。あまりにも正論なのだから。そして、自分達があまりにも醜く見えたから。生徒のために、そんな大切なことが抜けていた自分自身を攻めるように山田は臍ほそを噛む。

「山田先生、俺は貴女を誤解していたようです。申し訳ありません」
そう言って一夏は謝罪を込めて深々と頭を下げた。先程までの冷酷な表情は一転して真っ直ぐで真剣なモノになっていた。

「き、桐生君!？」

慌ててふためく山田に向けて一夏は謝罪のまま言葉を続ける。

「今まで俺はこの学園にいる女性全てが女性上位の風潮に毒された人間だと思っていました。ISを使える自分達は他の人間と違うと自分達は優れた人間だと。だから、正直、今からの三年間に期待などなく、適当に過ごそうかとも考えていました。ですが、山田先生、貴女は男の、しかも未熟な年下である俺の言葉を聞いて自分の非を認め、後悔していらっしやる」

貴女はそのままです。いってください。そう言い残して一夏は去っていた。

「彼は 桐生君は何者なんでしょうか？」

段々と遠くなっていく一夏の背中を見つめながら、素直に湧き出た疑問を気付けば山田はポツリと呟いていた。

「桐生 一馬 聞いたことはないか？」

「い、いえ」

「関東の極道たちに『伝説の龍』として未だ語り継がれる男だ。そして、一夏はその養子だよ。いまどき、あそこまで筋の通った男は珍しい」

「なるほど、だからあんなに」

山田の中では年下の男に説教されたことへの怒りなど微塵もなかった。事実、今までの自分がどれだけ教師として未熟であったかを気付かされたか。彼の言葉は曲がりきっていた自分を正してくれたから。

実際のところIS関連で働いている人間の多くは教員免許など持っていない。あくまでIS操縦を指導する立場でしかないからだ。しかし、生徒達からすれば自分は『教師』に他ならない。そんな簡単なことを何故気付かなかつたのだろうか。

認められたい　そんな思いが山田の胸の内側をくすぐる。

「惚れるなよ？あれは将来、関東最大の極道『東城会』の七代目を約束されている人間だ」

忠告してくる織斑の言葉は山田の耳には届かなかった。山田の中にある感情はそんな俗物じみたモノではなかった。尊敬・崇拜そんな言葉では語りつくせない。

そんなことを考えながらふと疑問に思った。一夏の自己紹介のときに言ったあの言葉　『ISが嫌い』という言葉。筋の通ったあの男が、自分が尊敬の念を感じるほど背中の大きなあの人が、何故あそこまでISを憎んでいるのだろうか？

織斑に尋ねようとして、山田はやめた。多分、今の自分にはそれを聞く資格がない。自分なりに努力して、胸を張って自分は教師だと言える様になつたら、直接本人に尋ねよう。そう心に決めてグツと拳を握る山田の姿を織斑は少し呆れ気味に見ていたのだった。

内心、一夏の隣に立っている自分の着物姿を想像して極道の妻もイイと思ってしまったことは山田だけの秘密である……

第四話『愚者の選定』(前書き)

皆さんの言葉が作者の力です。

訂正しました

第四話『愚者の選定』

セシリアとの一悶着があつてから幾日かが経過した。あれからこの学園の生活は少しずつではあるが正常に回り始めている。

一番の理由は単純に好奇の目が薄れたからだ。始めは唯一の男子ということが集まつていた観客も興味を失つたからか、段々と人数が減つてきた。見世物とはこういうものだろうと一夏は達観していた。見世物になるためには見世物になるだけの理由があり、その人気を維持するためにはそれだけのイベントが必要になるからだ。初日はあれだけの暴言を吐き続けていたものの、そんな姿が嘘であつたかのような静かな佇まい。更に授業に関しては真面目。今の一夏の印象は静かな優等生に過ぎない。クラスメイト達とは必要以上の会話はしていないが、全く無いという訳ではない。一目瞭然の変化。異常という言葉添えてもいい。

ここまで一夏の印象が変わるには一夏自身に理由がある。

一夏には決して頭の上からない人間が二人いる。別に怖いからというマイナスな理由ではない、純粹に尊敬しているが上だ。一人は当然ながら『桐生 一馬』である。そして、もう一人 一夏にとつては 師匠 と呼べる人間である。先日の一悶着の後、一夏は自分の中に燻ぶるいらつきを発散させるためにホテルに向かう前に夜の街、神室町に向かつたのだ。そこでたまたま一夏は再会してしまつたのだつた。その後のことは一夏の体裁のために語らないでおこう。端的に言えば、その未熟さに完膚なきまでに叩きのめされ説教ブラ

結果的に一夏は本来の自分の姿を取り戻したといえるのかもしい。ISに対する憎しみや織斑に対する怒りは変わらない。けれど、それを他人に当たるのをやめたのだ。それだけで一夏への評価が此処まで変わるのだから、現金というかくだらないうか。

「 それでは、再来週に行われるクラス対抗戦の代表者を決めたいと思います」

一夏も変わつた。けれど一番変化が現われたのは教壇に立ち優しげな笑みを浮かべて話をしている山田だろう。少し自信なさげで頼りない印象のあつた彼女だがこの一週間でがらりと雰囲気を変化していたのだった。それは服装一つにしてもの話である。胸元が少し開いていた以前と比べ、明らかに露出が減っている。尚且つ今まではほとんど着た事がないであろうスーツである。

まだまだ着慣れない感覚もあるがそれは時間が解決してくれるものだろう。

「クラス代表というのは対抗戦だけでなく、生徒会の会議や役員の仕事も含まれます。言ってみればクラス委員のようなものだと思うてくれればいいです。」

自薦他薦は問いません。誰かいませんか？」

教室内が静まり返る。当然の話だ。クラス代表。この重みというのは当然クラス全員が理解している。入学後、一週間も経っていない状況で、そんな大役が務まらないことは理解できているのだ。

唯一、どこかの金髪バカは自信満々に踏ん反りかえっている。自分から立候補しない辺り、他人から推薦されるのが当然ぐらいの感覚なのだろう。

そんな中、一人の少女が躊躇いがちに手を上げた。

「桐生君を推薦します！！」

瞬間、一気に教室が沸きあがる。クラスの総意とばかりに喧騒に包まれる。

一夏はめまいを覚えた。この流れは予想があった。唯一の男子である一夏にそういった期待が来るであろうと。しかしだ、そんな簡単なことでクラス代表を決めて良い訳がない。

一夏は静かに手を上げる。

「はい、桐生君」

「一応、他薦ということだから辞退は出来ないだろうから、それに関してはどうでもいい。ただ、単純に面白そうだという感覚は辞めて欲しい。俺は、此処にいる皆と同じようにこの学園に来て初めて本格的にISに触れているような人間だ。

男だというだけで代表を選ぶのは皆にとっても良いものではないだろう。それをしっかり考えてくれ」

それだけ言うと一夏は諦めた表情で席に着いた。再び静かになる教室。正論だった。そして同時に発言しようとする生徒がいなくなつた。

間違えたか！？

一夏は内心後悔の渦に飲まれていた。自分を推薦した人間がそれを取り消すかもしれないという思いがあつたが、逆にこれ以上の発言を止める結果になつてしまった。このままでは一夏のクラス代表が決まってしまうのだ。

「納得がいきませんわ！！」

ガタリツと椅子を引く音をたててセシリアが立ち上がる。机に両手をつき、いかにも憤慨している態度だった。

「そのような選出は認められません！！男がクラス代表だなんてイ恥さらしですわ。」

このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

まるでオペラ歌手のように大仰な態度で話すセシリアの態度に全体がげんなりとした雰囲気になる。全員がこの金髪バカがメンドクサイことを理解しているのだった。

「わたくしだいたい文化的に後進的な国に暮らさなければならぬこと自体、私にとっては耐え難い苦痛で」

わなわなと拳を震わせてそんなことをセシリアは吐き続ける。

全員の内心は一つに揃っていた。

『じゃあ、さっさと帰れよ』と。

ただ、メンドクサイので誰も何も言わない。

「それでは、意見がなければ桐生君をクラス代表として登録しますがいいですか？」

そんな空気の中、唯一冷静だった山田が淡々と確認する。

「山田先生!! 貴女は何を言ってますの!？」

理解できないとばかりにセシリアは吠えた。

「セシリアさん、貴女が言っているのは桐生君が代表になるのが気に入らないだけですよね。自分が立候補するわけでもなく、誰かを推薦しているわけでもないんですから、結局、候補は桐生君だけです」

何か問題でも？とばかりに返す山田の態度にセシリアはうろたえる。

「そもそも、有名なものが何もない自分の国を棚に上げて他人の国をバカにすんなよ。飯がマズイ国で殿堂入りの国がよ」

ぼそ、と一夏が呟いた。

「おいしい料理はたくさんありますわ！！貴方、私の祖国を侮辱しますの！？」

聴こえないように呟いたつもりだったが、どうやら聴こえていたらしい。

「あのさ、ついさつき自分が俺達の祖国を侮辱してるって事は理解してるか？」

「貴方のような無礼な人間がいる国など大したことありませんわ！
！貴方のような人間を育てるような両親もろくでもな」

「訂正しろ」

一夏の中にある禁句を彼女は口にしてしまった。勢いで叫んでいたセシリアは一夏の言葉が聞こえていなかったらしい。一夏の急激な変貌に気付いていない。

「何か言いました？」

怪訝な表情で尋ねてくる。

「今の言葉を訂正しろと言ってるんだ。セシリア・オルコット！」

一夏の目には純粋な怒りに溢れていた。静かに、それでいて熱く一夏の身体は怒りに燃えていた。

それでもセシリアは気付かない。一夏の言葉に更に怒りを強くする。

「決闘ですわ　　！！」

「とことんやってやるよ　遊びは一切無しだ」

売り言葉に買い言葉という奴だ。本来の一夏ならここまで激昂したりはしないだろう。しかし、今の一夏は止まらない。

「ワザと負けたりしたら私の小間使い、いや奴隷にしますわよ!？」

「で、どのぐらいのハンデでやる?」

「はあ?早速お願いですの」

一夏の言葉に素っ頓狂な声を上げるセシリアはあまりにも一夏の本気を理解していなかった。

「傲慢で我がままな小娘ガキのしつけをしてやるんだ。本気で相手してやるのはあまりにもくだらないだろ」

一夏がそう言うと、一瞬の間の後クラスが笑いの渦に包まれる。「本気で言ってるの?」とか「男が女より強いのはISが出来る前だよ」とか、そんな馬鹿にした言葉が聞こえてくる。笑わずに真っ直ぐ見つめているのは山田、織斑そしてサイズの明らかに間違えているようなダボダボの制服に身を包んだおっとりとした雰囲気を出す少女だけだった。

そんな喧騒の中、一夏は鋭く息を吐きながら右脚を踏み込む。たったそれだけで踏み込んだ右足の裏を中心に振動が波となってまるで地震のように床を振るわせる。いわゆる中国拳法における震脚といわれるものだ。

「分かってない連中が多いみたいだから一応言っとくがよ。今の世界で女性が上位に立っているのはISが『女性にしか使えなかった』からだ。で、今この場には『ISを使える男』がいるんだがさて、どっちが強いんだろうな？」

一夏の言葉がクラスメイトの胸に届いたかは分からない。

「それでは、クラス代表決定戦を次の月曜日に第3アリーナで行いますので、よろしいですか」

それでも一夏の戦いはようやく始まりを告げた。

第四話『愚者の選定』（後書き）

週間アクセス：6,448

マジで!?

こんな拙作を読んでいただいている皆さん本当にありがとうございます。

前話に関しては未だに納得できるものができないのでしばらくこのままにしておきます。申し訳ありません。

さて、ようやくクラス代表決定戦に入れるか!?とっていたのですが、次で入れそうにありません……すんません。

出来るだけキリがいいところで区切っているつもりですが、もう少ししっかりとした予定を立てるようにします。

第五話『準備は怠らず』(前書き)

遅くなりました!!
時間が掛かった分、若干長めですぜ。

第五話 『準備は怠らず』

決闘騒ぎからしばらく経過し、ゆっくりとだが喧騒は落ち着きを取り戻し始めていた。けれど、新たな火種はすぐに現われた。

「桐生、お前のISだが準備まで時間が掛かるぞ。

予備の機体がない。だから学園で専用機を用意するそうだ

」

平穩の日々というのはどうやらまだまだ先の方にあるらしい。

沸き立つ教室。「一年のこの時期に!？」「つまりそれって政府からの支援が出るって事よね？」などの羨望の言葉が巻き上がるが、そんな単純な話ではないことを理解している人間が何人いることだろうか？

「それを聞いて安心しましたわ。クラス代表決定戦、わたくしと貴方とでは勝負は見えていますけど、流石にわたくしが専用機、貴方が訓練機ではフェアではありませんものね」

なんて一夏の前で自慢げに語るセシリアは確実に理解していないだろう。

一夏は目の前のセシリアにはいい、とばかりに腕で流しながら織斑に問いかけた。

「実験台ということ間違いないですか？」

一瞬の間の後に織斑は神妙な顔で頷く。

「世界には467個しかISコアがない。ISの開発者である篠ノ之束がそれ以上の数を作ることを拒絶している。更に現在は博士

本人も行方不明だ。そのため世界中では割り振られたコアから研究・開発を行っている。本来では専用機は国家・企業に所属している人間しか得られない。しかし、お前に關しては状況が状況なのでデータ収集を目的にして専用機が用意される」

これが現実。

要は実験台なのだ。ISは女性にしか扱えない、それが何故なのか。その一つの鍵が一夏なのだ。一夏がISを扱える理由が解明できれば男でもISが使えるようになるかもしれない。そんな妄想じみた希望が一夏に専用機に与えるという結果に結びついている。

「俺には必要ない気もしますがね。貰える物は貰っておきますよ」

『必要ない』その言葉に一瞬織斑の顔が歪むが「そうか」とだけ応えるだけで話は終了しかけた。ところが、更に火種に油を注ぐような発言が起きる。

「あの先生、篠ノ之さんってもしかして篠ノ之博士の関係者ですか？」

まさに『空気が読めない』というやつだ。一夏は溜息を漏らさざるを得なかった。何故このタイミングでそんなことを訊いたのかと小一時間ほど問いただしたいほどに。

「そつだ、篠ノ之はアイツの妹だ」

もう何度目になるかも分からない歓声が沸き起こる。さつきから静かだった筈の方がわなわなと震え、口を真一文字に結んで何かを我慢していた。

「はいはい、騒ぐのはいいが一応授業中だ。しかも、その話は篠ノ

之からしたらプライベートな話だろう？そんなことで盛り上がるのはあまりに不謹慎じゃないか」

一夏は宥めるように周りの騒ぎを抑えこむ。そんな一夏を筭は意外そうにそして眩しそうに目を細めて眺める。自分が同じ立場になったときに、自分は助けられることができるだろうか？そんな考えが頭の中をぐるぐる駆け回る。

「山田先生、授業を」

「はい」

一夏を眺める筭の様子に気付いていながら、織斑は山田に授業を促して授業は再開された。

……

……

授業の終わりの鐘が鳴り、颯爽と生徒達が出て行くなか、一夏はぼんやり席に座ったまま考え事をしていた。

一夏はクラス代表を決める際に一つだけ嘘をついた。

『入試のとき以外、ISに触れたことがない』

紛れもない嘘だった。一夏はISに常に触れている。

四六時中　ぼんやりしている今も。決して、ISの運命から逃れられないのもそれが理由だ。ISは使用者との行動によって自己進化し、使用者にとって最高のパートナーになる。そういう意味では一夏という存在はISの進化の果てにいる存在なのかも知れない。

そんな風に考えて一夏は自嘲の笑みを漏らす。くだらないとばかり

に小さく伸びをして立ち上がる。すると、合わせるかのように箒が一夏のそばへとやってくる。

「一夏、さっきは」

「箒、飯食いに行こうぜ」

箒の言葉を遮って一夏は箒を教室から連れ出す。一夏からすればさつきのことなど礼をされるほどのことではないし、わざわざ箒に気にされても困る。だから、少々無理矢理な形ではあったが流したのだった。一方、箒はそんな一夏の態度にうつすら笑みを浮かべるだけで、それ以上何も言わない。久しぶりに会った一夏は今までの一夏とはまるで違う。けれどこういう行動に今までの一夏らしさを感じてしまう。それが嬉しかった。

「はい、日替わり定食にカツ丼にきつねうどんね　アンタこんなに食べて大丈夫かい？」

料理を用意してくれたおばちゃんが若干目を丸くしながら尋ねてくる。今まで女性に食事を提供しているだけだったのでかなり大量に見えてしまうのだろう。まあ、一般的に考えてもかなりの量なのだが。

「大丈夫だよ。ココの飯もすごく美味しいし　これで太ったら訴えてもいい？」

「ハハッ自業自得だよ」

軽口を叩き合って空いていた丸テーブルの席に着いた。一夏にとってこういう時間は何より大切だったりする。教員よりも施設で働く

人たちのほうが気兼ねなく話せる。

「い、一夏、本当にそんなに食べるのか？」

少し遅れてやってきた箒の目も引き気味だった。一夏の料理だけでテーブルの半分以上が占領されている光景はあまりにも異常だった。

「俺さ、どうも燃費が悪くてな。これぐらい食わないと午後がきついんだよ」

二人で向かい合うように座って食事を始めた。お互い食事中は話さない主義だからかあまり会話は無い。ただ、静かに食事は続いた。

「一夏、本当にきれいな食べ方をするな」

箒は一夏の食べる姿に釘付けだった。姿勢をただし、左手にご飯茶碗を持ち、零すことなくそれぞれを食べる姿はしっかりと礼儀に則って上品さがあつた。

「ん？ああ、家はすごく礼儀づるさくてな。鍛えられてくうちに、自然と作法が身についたよ。何か変か？」

一夏自身、特に気にしているわけではないが、家族やよく会う人以外と食事を共にする際に、こういったことが良くあるため自分の食べ方が可笑しいのかも思うときがあるのだった。そんなことを知ってか知らずか、箒は「いや、そんなことはない」と慌てて否定すると食事を再開する。一夏のほうも、そんなに焦るようなことかと不思議に思いつつも、うどんをすするのであった。

「ねえ君って噂の子でしょ」

一夏がうどんと日替わり定食のほとんどを食べ終え、カツ丼に取り掛かっているときだった。突然、一夏に声が掛かる。肩辺りまである茶髪の少女だった。

「代表候補生と戦うって聞いたけど、でも君、素人だよな？あたしが教えてあげよっか？」

何というか癪に障る声色でそんなことを言う少女はおそらく二年の先輩だろう。親切で言っている様に見えて魂胆が言葉の端々に見え隠れする。

「結構です。俺に構う暇があつたら自分の技術でも上げる努力をしたらどうですか、先輩」

一夏は冷たくあしらって食事を再開する。

「君、先輩がせっかく親切に」

「親切ねえ……親切って言いたいんなら、腹の中にある好奇心をどっかにやってから来てください。見えすえてますよ、先輩」

それ以降、一夏は一言も喋らずに食事に取り掛かる。目の前の箸も、声を掛けてきた先輩も言葉を発せなかった。ただ、一夏の無言の圧力に押され緊張する。流石に居心地が悪くなったのか、先輩は咳払いを一つして逃げるように去っていった。

「な、なあ一夏、放課後に手合わせしないか？」

箸は気になっていた。一夏とは幼い頃から同じ道場に通っている仲

だ。あれからどれぐらい一夏が強くなっているのか気になるのも仕方のない話だ。

一夏は筭の言葉にしばらく考え込んで応えた。

「俺は今は剣道をしていないが、それでもいいか？」

一夏は正直に答えることにした。筭はどこか昔の一夏を求めている。自分は変わっているし、これから先戻ることもない。だから、一夏は決意を新たにするとこんなところで俺は止まれないと

「それは分かっている。お前の身の動き一つとっても剣の動きに染まった人間のものではないぐらい承知だ。

けれど、お前の挙動は確かに武に生きている人間のものだ。それに感嘆こそすれどバカにすることはない」

対する筭も正直に、真正面に告げた。関係ないと

「分かった。なら、放課後 手合わせしよう。

俺はこんなところでは負けられない」

「それは私も同じだ」

お互いの瞳がギラリと獣の色を濃くなる。

確かにそこにいたのは再会を祝う幼馴染ではなく、雌雄を決するべく相打つ獣だった。

……

………
午後の授業は特に語ることはない。当たり前のような正常な時間の流れがそこにはあった。けれど、一夏の瞳はひどく輝き、近寄りがたい雰囲気を感じていた。

篤は一夏をつれて学園内の道場にやってきた。二人の異常な雰囲気に気付いてか何人かのクラスメートがついてきているが二人とも気にした様子もない。

一夏は全く使われていない男性用更衣室に入ると、早速準備していたジャージに着替える。上下とも闇のような黒、眼帯と髪色、そして引き締まった肉体もあいまって、その姿は黒豹クロヒョウのようにもみえる。

更衣室を出て、一夏は道場の中央で静かに正座すると目を閉じる。

精神集中のために邪念を少しずつ取り払い、意志を消し、自らの存在を空気と同化させていく。段々と『個』という感覚が消えていき、少しずつ周りの喧騒が薄れていく。そこあるのは無限に広がる世界そのもの

「待たせたか？」

篤が近づいてくる気配に一夏は目を開けると、すぐ近くまで彼女は来ていた。剣道着に身を包み、防具としては胴だけを装備している。本来の剣道の試合であれば決してありえないものだが、これはルールの枠に縛られた家畜の戦いではなく、単純にどちらが強いかという野生の勝負だ。審判もなく、勝敗はお互いの気持ちの折れたときのみ。

「私は竹刀を使うが、お前は要らないのか？」

要らないと応えようとして一夏の目に一振りの竹刀が留まった。竹刀というには短すぎるそれ。長さは一般的な竹刀の半分程度。それが一夏の心に突き刺さる。無言でその竹刀のそばまで行って手に取るととても手に馴染む。軽く何度か振ると、満足そうに頷く。

「それで　いいのか？」

そう尋ねる筈の顔は不満というか不審というかそんな表情で固まっていた。

筈の態度もある意味当然だ。一夏は知りもしないが、一夏の持つ短い竹刀は二刀流用のものなのだ。剣道の試合ではほとんど見ないが二刀流の流派も確かに存在する。実際の試合にも参加できる。剣道での二刀流は左手に一般的な竹刀を右手に脇差を模した竹刀を持って戦うのだが、ここで一つの問題がある。弱いのだ。二刀流では右手の竹刀は防御、左手の竹刀は攻撃と完全に分かれている。更に、それぞれを片手で扱うため、弾かれやすい。試合においての二刀流はイロモノに近い。

そういった感覚が強い分、筈は不満が残るのだ。そんなモノで戦うのかと。

一方、一夏にとってこの脇差は非常に馴染みのある長さだ。重さは軽すぎるが、使い勝手のいいサイズだった。だからこそ一夏は無言で構える。竹刀の先を筈の喉元へ向けるように右手を軽く突き出し、身体は半身気味。上半身を軽く傾けている。

言葉は要らない。

フツと筈は小さく笑んで構える。

シンと凍えるような寒気が道場を支配する。どこかで息を呑む音が聞こえた。

「やあああああ！！！！！！！」

掛け声一つ。間合いぎりぎりの距離から刹那の踏み込み。箒の踏み込みで一瞬ともいえる時間に二人は重なるような程近くなる。それに合わせる様に一夏も一歩だけ右前に足を送り、そこから喉元に向けて突きを放つ。

「クッ!!」

箒はとつさに竹刀をすべりこませ、一夏の突きを逸らす。しかし、それを読んでいた一夏は逸らされた突きの流れでくるりと右肩を前に向けるとそのまま半身を箒の胴辺りにぶつける。いわゆる体当たり。

防具があるため痛みは少ない。しかしそれでも衝撃はダイレクトに伝わる。

「おらぁッ!!」

間合いを取るために下がろうとした箒にその衝撃は必要以上の推進力を与え、勢いを殺しきれずに踏鞴たたらを踏む。それを一夏は静かに眺める。

「言っただろ。俺は剣士じゃないってな。けどな、勝負は武器の有無で決まるもんじゃねえ。

来いよ、箒。見せてくれ、お前の本気を!!」

舐めていた。いわゆる剣道三倍段という言葉がある。言葉通り、剣を持つものに持たないものが勝つためには三倍の実力が必要だという意味だ。

しかし、これは剣士が無手と戦うことに慣れていることが前提だ。間合いの違い、手数の違い。そういったものを理解していないと、戸惑ってしまう。

逆に一夏は神室町で鍛えた路上のテクニクを鍛えている。鉄パイプや木刀、そういつた得物を持った相手と戦っている。そういう意味では一夏の方が有利ともいえる。

一夏の言葉に箒の顔が一気に引きしまった。より剣士の顔に、より武士の表情へ変わった。

ココから勝負だと、一夏の顔も嬉しそうに犬歯を剥き出す。

一夏は自ら攻める。潜り込むように状態を箒の胸元に向けて沈め、そこから跳ね上げるように右腕を振り上げる。

「シッ!」

それに対して箒は鍔元で一夏の竹刀を叩き落とし、そこから手首を返して一夏の右胸へと翻す。吸い込まれるように打ち込まれる一撃に、一夏はニヤリとほくそ笑んだ。

「な!」

一夏はすばやく右手を引くと反動で左ひざを箒の手元に叩きこむ。真正面からの打撃に箒の顔が痛々しく歪むが決して竹刀を離さないのはさすがだろう。

しかし 一夏にとってはそれで充分だ。あげていた左足でそのまま箒の右足を刈る。

剣を使う人間は下段の攻撃に極端に弱い。そのまま箒はバランスを崩して倒れこんだ。

「私の、負けだ」

受身もとれずに倒れこんだ箒の目の前には一夏の拳が突きつけられ

ていた。

箒の言葉に一夏は握っていた拳を明けて手をそのまま箒に向けた。箒もその手を取って立ち上がる。

「楽しかったぜ、箒」

「ああ、私もだ」

今後、ISを扱っていく箒にとって無手、そして剣以外の相手との戦いは確かに重要な役割を果たすだろう。そういう意味では貴重な体験だった。箒も自分の課題を見つけられたからか満足そうに頷く。

「一夏」

晴れやかな顔で声を掛ける箒。

「負けるなよ」

「当たり前だ」

箒が突き出してきた拳に力強く頷いて一夏も拳をあわせる。負けるわけにはいかない。『桐生』の名を継ぐものとして……

第五話『準備は怠らず』（後書き）

篤の性格がかなり男前になってしまったような……

タグに『性格崩壊』とか入れようかな。。。

はてさて、以前から言っていた通り、次回いよいよ『クラス代表決定戦』に突入します。ISらしい戦闘を提供できるように頑張ります。

第六話 『クラス代表決定戦・前編』 (前書き)

遅くなりなしたがなんとか投稿出来ました。

今回の話と次回で急展開！！って感じですよ。

他のIS作品との差別化を図りたいな。なんて考えとります。

第六話『クラス代表決定戦・前編』

代表決定戦当日

別段に特別なことはしなかった。日課となつていているトレーニングに精を出し自らの身体を鍛えつつ、日ごろの授業に集中する。

一夏は知っている。強い者ほど日ごろの鍛錬を怠らない。頂に上る者ほど足元を大事にすると。だから、一夏はいつもと変わらない。それでも、一夏はアリーナへと繋がるISの発進口のある控え室で溜息混じりの言葉を漏らす。

「なあ、箒。代表決定戦開始10分前になつてもまだ専用機が到着しないってどういうことだ？」

案の定というべきか。本来、専用機というのはそう簡単に用意できるわけではないのだ。専用機とは、その使う人間にあつた形を具現化したものだ。確かに、実験的な武装を配備した機体もある。しかし、それでも使用者の適正を掴んだ上で、ISを作る。なのに、今回に限つて言えば、おかしなことに『一夏に対する適正の調査』が一度もなされていない。また、一夏もISに乗るのは二度目。はっきり言つて適正もクソもない。にもかかわらずソレが用意される。その事実の一つの結論を導き出すのに充分なものだ。

「し、知るか!!」

尋ねられた箒にすれば応えられるような内容ではない。知っているわけがないのだから。

「ま、気楽に待つかね……」

腕を組んだまま、一夏は壁に寄りかかって目を閉じる。

考えてても仕方がない。既に賽は投げられている。

そんな風に結論付けていた。そんな一夏の余裕な態度に箒は諫めようかと口を開こうとした。箒からすれば、一夏の態度は樂觀的過ぎる。生身の一夏が強いことは手合わせの中で嫌というほど理解できている。しかし、生身がどれだけ強かろうとも相手は『代表候補生』。弱いわけがない。心配だった。不安を出来るだけ悟られないようにしながら、それでも一夏を応援したい。そんな思いが箒を突き動かす。

「桐生君！！きました。桐生君の専用機が　　！！」

一夏達が待機していた部屋に焦りで上ずった山田先生の声が放送で響き渡る。

「桐生、時間がない。アリーナを使える時間も限られている。慣らしはぶつつけ本番で行え。問題あるか？」

織斑の言葉は一見すれば無理難題もいいところだ。たった今、到着した専用機。ソレは形ばかりのハリボテだ。『初期化』と『最適化』フォーマット フィッティングを行って初めて専用機としての真価を発揮する。

そんなむちゃくちゃな状況にも関わらず一夏は静かに目を開くと、問題ないとはかりに獰猛な笑みを浮かべる。と、同時に搬入口のハッチが開いた。姿を現したのは輝く白の機体。それは鎧と言っても過言ではない程の重厚さを持っていた。洗練されたスマートさはなく、無骨な印象を与えてくる。

すぐさま、一夏は更衣室に駆け込み、ISスーツに着替えた。その上で再び専用機に近づくと、そっと胴体部分に手を添えた。

そのあまりの自然体な様子に筭は一瞬、啞然とする。そして納得したように音もなくクスリと年相応に笑んだ。自分は何を心配していたのだろうか。一夏はいつもと同じだ。焦りもなく、高揚もなく、緊張もない。彼は自分の力を信じている。ならば、自分も一夏を信じよう。

「ソレが、桐生君の専用機 『白式』です!!」

興奮した様子で声を荒げる山田先生とは対照的に一夏は冷静だった。

「コイツは」

実際の機体に触れ、一夏は気付いた。気付いてしまった。

「俺にこれに乗れというのは!?!」

誰にも聴こえないように、しかし怒りをあらわにして一夏は身体を震わせた。

「そうか、そこまで俺に『織斑』を続けさせたいか」

拳を握り歯を食いしばりながら、それでも一夏は敵^{かたき}へと乗り込む。背中を胴体部に預け前を向くと、肩を守るようにアーマーが一夏の身体を支える。それにあわせて一夏の目の前にモニターが現われ機体の情報を示す。

「『白式』か」

自らを諫めるように一夏はそっと呟いた。

「セシリアさんの機体は『ブルー・ティアーズ』、遠距離射撃型の機体です」

「『蒼い雫』ね。大層な名前だな」

モニターの画面が切り替わって今度はセシリアの機体の情報を伝えてくる。一夏のモノとは異なり線は細い。

「ISには絶対防御という機能があつて、どんな攻撃を受けても、最低限操縦者の命は守られるようになっていきます。ただその場合、シールドエネルギーは極端に消耗します。分かってますよね」

「桐生、気分は悪くないか？」

山田と織斑、それぞれからの最終確認の言葉かけられる。

「大丈夫です。まあ、『こんな機体』に乗せられることには不満があります。今回だけは我慢しますよ」

一夏は淡々と、機械的に応えた。その言葉の意味を理解できたのは織斑一人。そんな彼女の顔は一瞬うつむいて表情は読み取れない。

「箒」

「なんだ？」

怪訝そうな箒に一夏はただ一言だけ呟いた。

いつてくる

その言葉に筭は一瞬うるたえる。一夏の表情は少し険しい。先程の『こんな機体』という言葉に何か意味があるのだろうか。しかし、一夏の目はそれでも前を真つ直ぐ見据えていた。その瞳は、正しく人間だった。だから筭も真剣な表情で返す。

勝ってこい、と

一夏は無言で頷くとゆっくりとした足取りでカタパルトの溝に足をかける。そして身体を前に傾けると、肩に浮かぶ翼のようなブースターが推進力を生み出し一気に加速するとそのままアリーナの空へと駆けた。

……

……

「最後のチャンスをあげますわ」

一夏が空を舞い、セシリアに身体を向けると彼女はわざとらしいほどの演技ぶった口調でそう言った。

一夏はその言葉を聞いた瞬間、鼻を鳴らして嗤う。

「ガキ、一つだけ言っておいてやる。誇りつてのはな、自分を大きく見せるハリボテじゃないんだ。自らの足で貫き通した人間の証だ。自分を大きく見せたいなら、四六時中ISっていう飾りを着込んで。そしたら、大層、大きく見えんだらうよ」

二人の間には限りなく大きな境界線があった。かたや驕り（ハリボテ）に身を包んだ者。かたや漢の背中に信念を学んだ者。

一夏の言葉の重みに気付かないセシリアはこめかみをひくつかせる。

「そう　なら、お別れですわね！！」

『白式』から警告音と共に真つ赤なアラートが映る。

セシリアは怒りに身を任せ、武装である身長半分はありそうな巨大なレーザーライフル　スターライトmk?を瞬間的に展開するとそのまま一夏に向けて閃光を放った。

「ハッ　こんなモン、なッ!？」

かわせるはずだった。しかし、思った以上に動けない。本来は一夏を助けるはずの『白式』がまるで拘束具のように一夏の身体を縛り付けていた。思い通りに動けない一夏はとっさに両腕をクロスしてレーザーを受ける。しかし、衝撃は抑えきれずに上半身がのけぞり、高度を保てずに一気に地面へと降下させられる。

モニターには肩への被弾を表す赤いシグナルがともる。

何が　起きているんだ!？

激しい動揺が一夏の心を襲っていた。なんとか地面スレスレで体勢を立て直したものの、先程の一撃で完全に流れを逸してしまった。そのまま、一夏に向けて放たれた光線をギリギリでかわす。逃げた先に読んでいたとばかりに更なる攻撃を加えられ、再び一夏はソレを腕で防いだ。

「さあ、踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルー・ティア

「ズの奏でるワルツでッ！！」

今の一回で完全に一夏を見下したセシリアは距離の開いた一夏に向けて狐狩りのようにレーザーの奔流を幾度となく放ち、いたぶっていく。

所変わって、控え室で一夏の勝利を祈る箒は目も前のモニターに移る光景が信じられなかった。

「何をやっている、一夏　！？」

こぼれた言葉はまさしく箒の本心を如実にあらわしていた。箒と戦っていたときは打って変わっての動きの鈍さ。実際の一夏の実力をこの身で痛いほど理解している箒にとって見れば冗談以外の何物でもない。

一瞬、一夏が遊んでいるのかとも考えていたが、ソレにしても一夏の表情は動揺に埋め尽くされていることぐらいすぐに分かった。そして、それ以上に必死に抗っていることに。

その姿は鎖を引き千切らんと暴れまわる猛獣の姿を幻視させられた。一夏は必死に何かと戦っている、目の前で狩りを楽しんでいるセシリア以外のナニカと。

だから箒はただただ祈る。

一夏の勝利を

そしてもう一人、今の現状に違和感を感じている人間がいた。

織斑　千冬だ。

教師という立場だからこそ、ISの最深部に最も近かった人間だけ

からこそ、今の一夏の状況を最も理解していたかもしれない。腕を組んで真剣な目つきでモニターを睨む。そんな織斑を見て、一夏の状況を心配しているのかと考えて一切話しかけてはいないが、そうではなかった。

あの動きは、明らかに機体と操縦者の間にズレがある。しかし、桐生がISを乗りこなせないということは考えられない。

なぜなら、桐生は世界で一番ISに愛された存在だからだ。

ISを操縦する才能の一つに適正というものがある。ISを上手く操縦するための肉体的要素をランクとして表したものだ。大きく分けるとC〜Sの四段階存在するが、あくまで上手く操縦する可能性だけで、実際の訓練などで経験によって変化しやすいため一つの指針にしかない。しかし、唯一S判定だけは話が違う。この世界でS判定となっているのは最高位の称号を持つ人間だけだ。そんななか、一夏は入試で行われた適正検査でS判定をたたき出している。『今までISに乗ったことがないにも関わらず』だ。これがどれだけ異常なことか。

一夏はISに愛されている

だからこそ、今の状況はありえない。

そんな風に考えて、一つの結論に達して思わず目の前のキーボードを叩く。

まさか、IS自身が一夏を乗せることを拒絶しているというのか

!?

……

……

「くそッシールドが削られていく。ジリ貧か

何か装備は？」

アリーナ内の一夏は防戦一方だった。なんとか直撃自体は避けられているが、それでもダメージはある。せめて、武器を展開出来れば、そんな風に考えていた。その思考を読んでモニターに武装の情報が現われる。

「『雪片式型』だと」

モニターに映るのは一振りの刀。白式にはこれしか武装が搭載されていないらしい。
しかし

「これを使えというのか！？」

『白式』だけでなく『この刀』まで使わない。使ってたまるか！！」

一夏は覚えている。自分の右目を奪い、こんな身体にしてしまった一本の凶刃を

その刀が、今はこの機体に搭載されている。

「これしか使わせないとつもりか！！篠ノ之 束、お前はどれだけ俺を壊せば気が済むんだ　！！！！！」

そんな叫びが、アリーナ内に木霊した。

「何を言っているのかは知りませんが　これでお仕舞いです！！！」

とどめとばかりに、セシリアは自分の機体の代名詞ともいえる武装を展開する。

ISのスラスタ部分から四対の蒼のビットが展開された。

『ブルー・ティアーズ』

それぞれが一夏を全方位から囲むと、それぞれが狙い済ましたようなレーザーを発射する。

一夏は瞬間的にブースターを吹かし地面に向けて降下することでソレを回避する。

しかし、ビットは一夏を追い込むように後を追いかける。

「チイ ツー!!」

三方向からの狙撃を一夏は機体を無理矢理倒してかわす。しかし、ソレを見越していた上での最後の一機の攻撃が一夏の背後から襲い掛かった。

「ぐあああッ!!」

動物的勘で、それに気付いていたもののISは回避を拒む。

爆音がアリーナに響きわたった。観客として観戦していた生徒達も、その光景に目を見開き、こんなものかと落胆した。

ただ一人、筈だけが煙が立ち込める中心をじっと見つめていた。

「一夏、お前の本気はこんなものじゃないだろう？」

見せてくれ、お前の本当の力を」

ゆっくりと煙が晴れていく。セシリアは勝利を確信してかビットを自分の近くへと戻し、満足げにその光景を眺めていた。

「お前が、守ってくれたのか？」

セシリアの目の前には予期せぬ光景が映っていた。
無傷の一夏。そして、その一夏を守るように一夏の目の前をふわふわと浮くゴルフボールぐらいの純白の球体。それは、眩しいほどの光を掲げ、何かを待つように、じっと佇んでいた。
その光にどこか懐かしさを感じながら、一夏はそっとその球体に触れた。

刹那

一夏の脳裏に情報の波が押し寄せる。

自分が何であるか、何のためにここにいるのか。

暖かな波動が一夏の腕を伝わって胸に染み渡ってくる。

「ああ、そうか」と一夏は一人呟く。

「逃げていたのは俺のほうか

お前はずっと俺を待っていて、俺を望んでいたのか

一夏の言葉肯定するかのように球体が淡く輝きを増す。

「教えてくれ

『お前はどうしたい？』

父親が子供に尋ねるように。目元に優しげな色を称えて、一夏は球体に問いかける。

答えはすぐに返ってきた。一夏の目の前に広がるモニターに、文字の羅列が画面いっぱいに刻まれていく。

そら。ソラ。ソラ。空。宙。宇宙。

跳。飛。翔。駆。飛翔。

そうか、と一夏は笑みを深める。

「 なら、俺と一緒に飛ぼうぜ。翼はお前に任せる。翼を俺にくれるなら、俺はお前の前に立ちふさがる全てをぶち壊してやる
！！」

ソレは歓喜だった。

さっきまでの淡い光は一変して激しい光を放ってアリーナ全体を力強い光線が包み込む。

天に昇る龍となれ。そして、空を翔る一筋の閃光となれ

第六話『クラス代表決定戦・前編』（後書き）

一応、今回でようやく戦闘に突入。

戦闘描写の下手さに定評のある作者ではありますが、自分なりに必死に書きました。

少しでも楽しんでいただければと思います。

正直、不安だらけです……

誰か、戦闘描写のアドバイスをください、マジで。

次回をもって代表決定戦を終了して、オリジナルな方向に話を進めていこうと考えていますのでお楽しみに。

第七話 『クラス代表決定戦・後編』 (前書き)

— 夏無双発動!! —

第七話 『クラス代表決定戦・後編』

それは黒い繭だった

時折、繭の表面を稲妻のように白い光が奔る。
まるで生きているかのような脈動を繰り返すそれは、神を生み出す
地球の子宮のように見えた。

世界が変わる

その瞬間を私は目撃していたのかもしれない。

『生徒会長の手記』より

「な、何が起きたの!？」

セシリアには今の状況が理解できていなかった。いや、この空間にいる人間の中で、今、目の前に起きている事実を正しく認識している人間など全くいまい。

未知への恐怖。セシリアはそれでも自らの手に握り締められていたスターライトmk?を構える。震える指先に力を込め、引き金に指をかける。排除すること目目の前の異常を取り去ろうとする彼女。けれど、ソレが恐怖故の逃避であることをセシリアは理解できなかった。

「何が、起きてツいるのかは知りませんが、これで終わりです
!!!」

がたがたと音をたてる顎から無理矢理に言葉を発して終わりを告げるはずの引き金を引いた。

静寂

「?何故、発射されませんのツ!？」

何度も引き金を引くが、自らの武装は沈黙を保ったままだった。

故障 ?

そう考えて、今度はビットへと指示を送る。
しかし

「何故動きませんの!!!」

操縦者の意志に反してビットは身動き一つとらずに直径5メートルほどの黒い繭に向かって静止したままだ。

まるで、主からの命令を拒絶しているかのような

慌てふためくセシリアのモニターに文字の羅列が書きなぐられていく。

【拒絶

無粋。無礼。邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔邪魔。

歓喜歓喜。高揚。祝福。

龍ノ誕生。

新生　】

セシリアにとって、この状況は理解の範疇を越えていた。何が起きているのかさえ理解できない。唯一分かったことがあるとすれば、自分が自分の所持するISに拒絶されているということだけだ。そのことが理解できたが故に、セシリアは歯をギリツと噛み締める。何故、と何度も思考してみても答えは返ってこない。

「何が、起こっていますの　？」

再び紡がれる理不尽への嘆き。その言葉は自分以外の誰にも届かなかった。

それから数分後、変化は唐突に訪れた。

繭といってもいい漆黒の外殻が一際強い脈動を発すると萎むしぼように縮み始め、

人一人覆うぐらいの大きさになると一筋の切れ目が走った。まるで、ゲートが開くように亀裂は大きくなると、そこから一夏の姿が現われる。

「待たせたな、嬢ちゃん。ここからが本番だ」

狼のような獯猛な笑みを浮かべ、犬歯を剥き出しにする一夏の姿がそこにはあった。

一夏の展開しているISはその姿をがらりと変えていた。先程の機体の名残などどこにもない。一番に目を惹くのが、その大きさである。大体のISでは、そのサイズは装甲や装備の違いはあれど2メートルを軽く超える。ISを装備している状態での四肢のうち生身が占めているのは6割程度、残りは機械の四肢が伸びている。操縦士の意図を読み取り、足を動かしたり、指を曲げたりは出来るものの、あくまでそれは機械の動きだ。だから、基本的に近接戦では武器を用いる。殴る・蹴るなどといった繊細な動きを機械の四肢ではトレースできないからだ。

しかし、一夏のISは装甲が覆う部分が極端に少ない。確かに両肩から拳にかけてまで龍を模した籠手に覆われ、膝から下も脛当てのような黒の装甲があるものの、あくまでそれは身体の保護をしているだけのものだった。そのため、かなり小さく見える。生身での身長とほとんど変わっていないように感じる。

更に、一夏の背に浮かぶのは身長と同じぐらいありそうな巨大な一對の純白な翼だった。機械のような生体のような穢れを知らないそれは軽やかに羽ばたきながら一夏の身体を宙に留めていた。

そして、もう一つ。繭となっていた黒の殻が集まり球体となったものが一夏の胸の辺りにふわふわと浮かんでいた。

その姿は天使といっても過言ではないほどの荘厳さを発していた。

「何ですの、その姿は。小さく、そして装甲もほとんどなくなって
そんな可愛らしい姿で私と戦おうとでも？」

先程までの動揺していた姿とは打って変わって、余裕の表情を見せるセシリア。得体の知れなかつた繭から現われた一夏の姿が、あまりにも小さくなってからだろうか。装甲も少なく防御力があまりにもなさそうな姿は、弱そうに見える。

そんな少女の姿に一夏はククツと不敵に笑った。

「そりゃそうだ。これはあくまで『宙そらを駆ける』ための身体だ。余計なものを一切排除したまさに特別機。そして、IS本来の姿でもある。」

ようやく、この機体も完全に俺のものになった」

完全に自分のものになった

その一言からセシリアは一つの結論を導き出して驚愕する。

「まさか、貴方今まで初期設定で戦ってましたの！？今は一次移行

「一次移行？いや、これは再誕リバースだ。」

ようやく、俺にも望みが出来た。ただがむしやりに親父の背中を追っているだけのガキじゃられない。自分の運命を呪う悲劇のヒロインでもない。まずはこの戦いに勝って、その上で前に進むさ。俺はコイツと共に空へ昇る。この『昇龍のぼりりゅう』でな。だから、さっさと終わらせよう」

一夏はそう言って構える。武器も何も持たずに、右腕をダラリと下げ、上体を前に倒した獣のような構え。ただ、前に進むための準備

無言の静寂が一瞬のうちに広がった。障壁で隔たったアリーナの内
部に一瞬風が流れた。

刹那、一夏の姿がブレる。と、同時にセシリアのESから警告音が
響き、ハイパーセンサーからの情報が脳裏へと伝わってくる。

「後ろ　　!?!」

とっさに、ビットの一つに指示を出して後方の空間へとレーザーを
放つ。

その判断は正解だった。

「おっと」

一夏はその場でターンして閃光を避けたものの、そこから攻撃に転
じることが出来なかった。

もし、セシリアが後ろを振り返るといふ愚行を犯していれば今頃は
一夏に接近を許していたことだろう。

一夏は、その判断に感嘆しながら自分の機体の変化を確かめるよう
に手を握ったり閉じたりを繰り返す。そして腕を何度か廻すと再び
構えた。

その間にセシリアは数10m離れていた。

「おいおい、追いかけてこか?」

楽しそうに笑う一夏の様子を無視してセシリアは、ビットを一夏の
周囲に展開して自らはライフルを構えた。

「確かにスピードには目を見張るものがありますが、この私に接近戦を仕掛けようとは愚の骨頂！近寄ることすら出来ないうちに打ち落として差し上げますわ」

その台詞と共にライフルから一閃が発射される。一夏はそれを半歩身体をずらすだけでかわすとそのままの勢いでセシリアへと肉迫した。

絶え間なく襲い来るレーザーの奔流の中を一夏はスピードに乗ったままの体勢で突き進む。掠る程度のものは無視し、致命傷になりえるものは

「おらあ！！」

自らの拳をもって撃ち払っていた。

「なアツ　！？」

その光景にセシリアは目を見開いた。

ありえない！！

そんな感情が彼女の頭を支配する。装甲で防いでいるのならば話は分からないでもない。けれどもシールドのエネルギーが減っている様子は微塵も感じられない。その事実が一つの結論を導き出す。一夏が身に纏っている装甲は武器だということに。それはあまりにも異常なことだ。装甲がない。それはすなわち防御面に関しては極端に薄いことを示す。確かにISには絶対防御があるため怪我はしないかもしれない。しかし、絶対防御は極端にエネルギーを消費する。「へえ、なかなか追いつけねえな　攻撃のためではなく、あくまで足止めか。悪くはねえ。悪くはねえが、そんなんじゃ追いつけねえぞ？」

そのままの勢いで加速し続ける一夏。一夏はまるで舞踏のように身体を旋回させながらも徐々にセシリアとの距離を詰めていく。

「お前の武装には欠点がある」

そうやって一夏はセシリアに向かっていった身体を無理矢理ねじり、4基のビットのうちの一つ、一夏の背後で隙をうかがっていたビットへと一気に接近すると、右手で無造作に掴みあげる。

「なああ!!!?」

「4基のビットの同時制御。確かに並外れた努力じゃ出来ることじやねえ。

けど、あくまで操ってるのはお前だ。癖もあれば、パターンもある。しかも、お前の性格上相手をいたぶって楽しむ傾向がある。4基のうち2基が陽動、もしくは相手の機動を制するための囮。1基が本命。残りの1基は保険ってトコだな。何か間違いでもあるか?」

【兵装『ブルー・ティアーズ』の情報を解析が完了】

モニターに映ったその言葉に一夏は一瞬頷くと手にしていたビットを両手で折ってみせた。それを投げ捨てると数瞬のち爆発した。

「それともう一つ。こっちは致命的な欠点だけだな
ビットの制御に集中しているときは自分は全く動けないだろ」

一夏はニヤリと笑んでセシリアへと駆ける。距離を詰めようとする一夏の動きは直線的でありながらセシリアの反撃をあざ笑うかの様にビットからの攻撃をかわし、ビットを殴り飛ばして破壊しながら

距離を詰めていく。
そして

「よう、追いかけっこはこれでお終いか？」

全てのビットを破壊し終わる頃には二人の距離が間近に迫った。

「かかりましたわね！」

そんな一夏に対してセシリアは高らかに笑うと、両肩のスラスターを展開する。

「ブルー・ティアーズは6基ありましてよ」

展開されたスラスターの隙間から2発のミサイルが射出される。
黒い煙を吐き出しながら一夏へと肉薄するミサイルは一夏のスピードもあいまって物凄い速さで衝突した。
つんざく爆音と共に黒煙が舞い上がる。

「これでお別れです」

更にとどめとばかりに手にしていたライフルで狙いを定め、引き金を2度引いた。吐き出された2発のレーザーは黒煙の中心、一夏がいるであろう位置に寸分変わらず着弾した。

命中を確認したセシリアは満足したように銃口を上に向けて構えを解いた。勝利を確信しての行動だった。
しかし、そんなセシリアの行動を笑う声が響いた。

「おいおい、勝手に終わらせてんなよ」

煙が晴れた。そこにあつたのは丸みを帯びた円形の何か。黒く染まったそれは先程の繭のように見えた。その盾は、煙が完全に晴れると再び球形にまとまって一夏の辺りに寄り添うように浮かんでいた。

「確かに俺の身体には装甲はないけどよ。装甲そのものがないとは言ってないだろ」

イタズラが成功した子供のように一夏は満足げに笑みを浮かべた。

「な、何ですの」

セシリアは明らかに動揺していた。構え直すことも忘れて、その光景を見ているしかなかった。

「俺の機体の専用兵装『流体装甲』。なんにでもなれる流体金属だよ。コイツは最強の盾であり 武器だ」

そう言つて一夏は球体へと無造作に右手を入れ、何かを掴みあげた。サイズが6割程度に縮んだ球体から現われたのは白鞘に包まれた一振りの短刀。一夏にとつては馴染みの深い一本のドスだった。鞘を抜き放つて投げ捨てると、鞘は形をどろりと溶かしながら再び球体へと吸い込まれ一つに纏まとまった。

「いくぞ、躑の時間だ」

セシリアにはその言葉が死刑執行の合図に聞こえた。既に二人の距離は目と鼻の先。遠距離射撃を得意とする彼女にとつて、この距離は直接的な敗北を意味する。近接用の装備がないわけではないが、その扱いはあまりにも稚拙。だからセシリアは一瞬の思考の後に後

退を選択する。しかし、その動きは動揺に揺さぶられてあまりにも怠慢だった。

「遅い　　！！」

完全にセシリアの懐に入り込んだ一夏は左手でライフルを跳ね上げ、右腕を突き入れる。

「ひいいいッ！！」

その情けない悲鳴が自分のものと気付いていただろうか。その一撃はセシリアの胴体部分の装甲を深々と抉る。

「これで終わりじゃねえぞ！！」

そんな言葉と共にセシリアの視界が影に覆われた。セシリアの真っ白になった思考をよそにハイパーセンサーは冷静に状況を伝えてくる。装甲に身を包んだそれは死神の鎌のようにセシリアの首を無造作に刈り取るうと迫った。先程の一撃で完全に動きの取れないセシリアは防御の体制すら取れない。鎌首がそのままセシリアの首筋に叩き込まれそうになった寸前　　甲高い破裂音と共にセシリアの身体が吹き飛ばされた。

「絶対防御か　　これで終わると思っていたんだがな」

振りぬいた蹴り足の感触の軽さを訝しげに思いながら、油断なくセシリアの姿を横目で眺める。

「ハア、ハア……『蹴り』ですって!？」

セシリアの驚きは当然だった。ISには出来ない動きが存在する。それは格闘戦だ。宙に浮いての空中戦を主にするISの戦闘では特に蹴りなどは不可能に近い。装甲が足を覆っているため、膝を曲げたり動作が困難だからだ。その問題を解決したとしても最大の問題が存在する。宙に浮かんでいる、それが示すのは『足場がない』。つまり踏み込めないのだ。そのため、近接格闘においても剣や槍などの武器を持った戦闘が主になっている。にも、関わらず一夏は地面に立っているのと同様に踏み込んでのハイキックを繰り返した。そのことに疑問を感じていたセシリアの視線の先に、ある物体が見えた。一夏の足元。そこに直径50センチほどの板状の物体が2枚、一夏の身体を支えるように足の裏に張り付いていた。

気付いたか、そう一夏は言った。

「足場がなければ造ればいい。俺の動きに合わせて足の裏に装甲を展開して足場にする」

理屈は分かる。しかし、自分の動きに合わせて流体金属を操作して足場を造る。そんな芸当が可能だろうか。先程の盾もそうだ。そんな操作を並行して行うことが出来るだろうか。それではまるでそこまで考えてセシリアの思考は完全に止まった。唇をわなわな震わせながら脳裏によぎった悪夢を口にする。

「まさか、私のブルー・ティアーズの情報を」

「さつき1基掴んだときにちつとばかり情報をいただいたよ。
それが俺のIS『昇龍』の単一仕様能力 ワンオフ・アビリティ 『進化因子』だ」

「なあああッ!？」

それはつまり、戦えば戦うほど強くなることに変わりない。

「だから、こんなことも出来るんだぜ」

右手のドスを再び球体の内部に戻して、一夏は呟く。

「兵装展開

type 『ドラゴンストライク龍牙』」

【了解。『龍牙』招来】

一夏の言葉に呼応するように球体が3つに割れる。半分の大きさのものが1つ。そして4分の1程度の大きさのものが2つ。その小さいほうの2つがゆっくりと形を変えていく。

「あ、あああああ」

その姿は、まさしくセシリアの専用装備ブルーティーズに酷似していた。漆黒に染まったそれはセシリアのもののようにレーザーの発射口はない代わりに先端が牙のように研ぎ澄まされ鈍い光を放っていた。

「行けッ!」

二対の牙が螺旋を描き、絡み合いながらセシリアへと突貫する。その様子にセシリアはようやくライフルを構える。

噛み合わない歯を無理矢理かみ締めながら『龍牙』へと光線を放った。それを牙はお互いに示し合わせたように離れることでやすやす

とかわす。そして1つはそのままの勢いで、もう1つは大きく旋回してセシリアの後方から襲い掛かる。

「くウ
」

装甲が抉れ絶対防御が発動したせいでエネルギーが枯渇しかけているセシリアはなんとかかわそうとするが完全にはかわし切れずに、右足と左肩の装甲を抉り取られる。勢いに押され、セシリアの身体は錐揉みしながら吹き飛ばされる。しかし、牙は吹き飛ばされた彼女の身体を執拗に追いたて噛み付いていく。

「こ、このおおおお！！！！」

最後のあがきだったかもしれない。蹴られ蹂躪される自分を悔しく感じながらも、けつしてセシリアは一夏から視線を離さない。爛と輝くセシリアの瞳からは今なお闘志が溢れていた。

一夏はそれに気付いて嗤う。

一瞬だった。何度目かも分からない牙の蹂躪を受けた瞬間、セシリアはライフルを構え引き金を引いた。攻撃の合間の一瞬間、そこにセシリアは全てを賭けた。

放たれた光線は一夏の方向とは違う方向に突き進む。

しかし、レーザーは途中で方向を変え、一夏へと突き進む。

『偏向射撃』 遠距離射撃の極致。そこに今彼女は到った。

だから、だからこそ一夏は真正面から彼女に対抗する。

翼の一枚一枚が展開し、そこから、現われるのはブースター。ソレがエネルギーを溜め込んで爆発する。龍の咆哮のごとき爆音は莫大な加速を生み出す。一夏の姿が一瞬で消える。音を置き去りにした加速は一瞬で一夏の身体をセシリアの懐へと突き進ませる。

「強かったぜ、セシリア。またやるっ」

真つ直ぐ一夏はセシリアの瞳を射抜く。対するセシリアも笑って応えた。

一夏が構えていた右拳に牙が装着され、クローのように伸びた。それをセシリアの腹部い躊躇いなく叩きこんだ。

二度目の絶対防御発動　と同時に展開していたISが消え、セシリアの身体が力なく落ちていく。

それを一夏は両腕で優しく抱きかかえ、ハッチへと飛ぶとカタパルトの先端に下ろした。

『　しよ、勝者、桐生一夏』

遅れてアナウンスされる勝者宣言。固唾を呑んで見守っていた観客から沸き立つ歓声。しかし、一夏はその様子をつまらなげに眺めてから宙に舞う。

そして、再び翼のブースターを展開してエネルギーを溜めていく。

「桐生！！何を　」

通信で織斑千冬の声が耳を打つが一夏はそれを完全に無視した。

「みせてやるよ、空をな」

その言葉に喜ぶように球体は明滅して、一夏の身体を薄く守るように包み込む。

それを確認して一夏は膝に力を込めて空を蹴った。

先程の速度が準備運動だったかのような加速をもって一夏の身体がアリーナの障壁へと突き刺さる。

第七話『クラス代表決定戦・後編』（後書き）

二週間もの放置申し訳ありません。期待して待っていた皆さん本当にありがとうございます。

ようやく学校が夏休みに突入したおかげで執筆に集中できるようになりました。これからはハイスピードで投稿したいと思います。

第八話 『空に浮かぶ太陽と海に沈む月』 (前書き)

かなり遅くなりました。

第八話 『空に浮かぶ太陽と海に沈む月』

クラス代表決定戦から大体2時間が過ぎていた。

「どうするかな……」

一夏はぼんやりと空を眺めながら太平洋の上空に浮かんでいた。空を飛びたいという『昇龍』の願いを叶えるためにアリーナの障壁を破壊して飛び出してきたものの、一つ問題が発生した。それが何かというと『昇龍』のいう空が宙　つまり宇宙だったこと。そして宇宙への単独飛行を可能にする程には『昇龍』の進化が進んでいなかったことだ。今の状況では成層圏への突入すら危ういという計算が導き出されていた。結果的に肩透かしのような状況だった。とはいえ、『昇龍』自身境界のない大空を自由に飛びまわれたことで一通りの満足感を得られているらしい。

それにしても

「とんでもない機体だな」

苦笑混じりの溜息を一夏は漏らした。あれからかなりの時間が経っているにも関わらず、IS学園からの追っ手もなく、国からの警告なんかもまったくくない状況だった。

「ジャミングに光学迷彩まで装備してやがったからな」

まさしく大空を翔るための機体だった。ISのコアネットワークからありとあらゆる武装・機体の知識を汲み取った結果、こういった進化を果たした。おかげでのんびり空中散策を楽しんでいるのだから

ら。

しかし、当然ながらこのままココに居続ける訳にもいかない。かといって今のままIS学園に帰るのも問題がある。

「さて、どうしたものかな」

一夏は再び呟く。今の状況をどうにかしたいというのもあるが、それ以上に招来の長期的な話に関してもだ。『宇宙に進出する』という目標を成し遂げる事は、今の世界においてはとても難しい。軍事利用が当然になっているISを本来の宇宙運営の形に戻すには、一度世界をひっくり返すようなイベントが必要だ。ISを世界に知らしめたあの『天災』のように
そのために必要なものが今の一夏には圧倒的に不足していた。ISの存在を脅かすような手段は逆効果だ。大きすぎず小さすぎず。そんな微妙な釣り合いを持たせるような手段をなんとかして手に入れなければならなかった。

「なんか良い手はないか？昇龍」

味方不足。足掛り必要

「そつだよなあー。まずは味方を集めてみるか。

最悪、全ISに反旗を翻させるって事もできるしな」

含みを持たせながらも一夏は獣のような笑みを零した。当たり前のようについてた言葉の真意は掴めない。けれど、一夏は明確に世界に散らばる全てのISの操作が出来ること示唆していた。

そんな風なことを考えながら途方に暮れている一夏を驚愕させるものが一夏の下へと伝わる。

通信。『提示スル座標ニ来ラレタシ』

それは一本の通信だった。

「ああ！？通信だと？おい、ジャミングが掛かってる状況でどこから通信が入るんだよ」

コアネットワーク

『昇龍』からの回答は簡潔だった。

「てことは、どっかの誰かがISを介して俺とコンタクトをとりたがってんのか？」

肯定

「なら返答を頼む。テメエラ何モンだつてな」

返信

回答アリ。『亡国企業』

「『亡国企業』ね」

その答えにしばらく無言で思考を回す。

一夏の行方はおそらく掴めていないはずだ。にも関わらず、ISのネットワークを使って一夏とコンタクトが取れるということは、それなりにISのコアを理解していることに他ならない。ならば、一夏の目標のためには一度会ってみる価値はあるかもしれない。そう一夏は判断した。

「提示されたポイントまでの時間は？」

約10分程度

「オーライ。なら会ってみるか。相手さんに『了解した。最高のもてなしを頼む』とでも伝えておけ」

返信完了。自動操縦開始

スラスターが蒼い炎を上げながら一夏の身体を押ししていく。流れる景色を一夏は楽しげに眺めていた。

……

……

時間通り約10分で目的地へと到着した。そこは太平洋のど真ん中。見渡す限り、海と空しかない。風に乗って潮を香りが一夏の鼻をくすぐる。

「何もないじゃないか」

拍子抜けとばかりに一夏は呟いた。しかしISのセンサーはしっかり何かを発見したようだ

進度1000メートル。物体発見。浮上中

「なるほどね」

モニターに表示された文字に笑みを深めた。そのまま、数分、真下の海面を眺めていた一夏にもようやく変化が見えてきた。海水の色が段々と薄くなり、更には海面がゆっくりと盛り上がるとその姿を現した。

全長100メートルクラスの巨大な流線形。それはまさしく

「潜水艦かよ。悪の組織っぽいねえ」

太陽の光を反射する無骨な装甲を眩しそうに一夏は眼を細め見つめる。それはまさしく潜水艦だった。しかし、一般的な潜水艦とは形が少し違っていた。一切のハッチがなかった。人が入れるような部分がまったく無い。本来あるはずの背びれのような搭乗口もなく、ラグビーボールのような外観をしていた。

「どっから アソコか」

どっから入るんだ？と言おうとした一夏の視線の先で潜水艦の前半分の上部が音一つなく二つに裂けた。そこから覗くのは外観と同じ素材で出来た床だった。

「まあ、行くしかないか。鬼が出るか蛇が出るか」

亡国企業

「知ってるよ」

ISからの良く分からない突っ込みに苦笑しながら「夏は潜水艦目
指して高度を下げた。」

第八話 『空に浮かぶ太陽と海に沈む月』（後書き）

言い訳させてください。

入院してました。一週間前にようやく退院できました。とは言っても病気ではないです。バイクで事故りまして……かなり面倒な状況でした。

携帯で細々書き進めてはいましたが、ようやく通院生活にも慣れてきたのでリハビリを兼ねて投稿しました。

しばらくはこんな感じで短い文章になるかもしれませんがご容赦ください。

山寺獄寺

第九話『海の底にて』（前書き）

ご無沙汰して申し訳ありません！！

皆様には土下座してもし足りませんが、お待ちしていただいていた皆様には精一杯の感謝を！！

時間かかった上に短いという状況ですが、ご容赦ください……

第九話 『海の底にて』

潜水艦内に入り込んだ途端、天井が閉鎖されるとともに小さな揺れが足元から伝わっていた。

どうやら、沈んでいるらしい。完全に天井が閉じると、揺れもすぐになくなった。

最初は真っ暗だったのだが、今は天井にある、特殊なライトによって薄暗いながらも明かりが辺りを包んでいた。

「まあ、悪の組織っぽいよな」

子供のようにニヤリと一夏は頬を歪めて、ISを待機状態へと移行させた。装甲が一瞬だけ強い光に包まれると、光は両腕に集まっていく。その輝きが収まると、手首から肘近くまでを覆う文字通りの手甲へと変化していた。

2匹の龍が腕に絡みつくように螺旋を描いている彫りをした鈍い銀に染まっている。

調子を確かめるように拳を握ってみたり、ぐるりと腕を回す。

「少し時間をもらえるように頼んでもらえるか？ ちょっと身体の調子を調べたいからよ」

返信。 『許可スルガ、対価トシテ観察サセテモラウ』

相手側からの返答に好きにしろ、とだけ答えると一夏はまわりをぐるりと見回した。

正直言つて、かなりの大きさの室内。体育館のようにだっ広く、おそらくここはISの発着場の役割を果たしているのだろう。

軽く跳躍して床の具合を確かめると右脚を引いて、体重を後ろに乗

せる。

肘に余裕を持たせたまま軽く両腕を前に突き出した。手の内側を手前に向けていて、正面から見るといつもよりも小さく見える。けれども、そこからにじみ出る威圧感は重苦しい。

先日 の 箒 と の 手 合 わ せ で 見 せ た 構 え と 比 べ る と 、 対 極 に あ る よ う な 構 え だ っ た 。 剛 と 柔 、 本 能 と 理 合 と も い う べ き も の 。

そこから一夏はフツと息を吐きながら左拳を突き出す。スピードを重視した動き。肩から先を動かしているだけなので、威力自体はそれほどではないが、スピードは速く、なにより動かす部分が少ない分戻りも早い。

ボクシングでいうところのジャブに近いものだ。

左を2発放ったところで今度は右をフック気味に打ち込む。さらに右腕を戻す反動を利用して腰を回転させて左足を振りぬく。

空気を切り裂く音をたてて敵の身体を刈り取るような一撃は、そのまま虚空に放たれた。

「そんなに違和感はないな……。ま、もうすこしやりますか」

ニヤリと笑って、一夏の放つ拳撃の嵐はさらに激しさを増していった。

……

……

少しばかりの時間を使って行われた鍛錬は一夏が大きく息を吐いたことで終了した。

「で、どこに行けばいいんだ？」

ここから見える扉は一つしかないが、そのあとの道筋なんか分かるはずない。

再度通信。 道筋ヲ確認。 視覚化シマス

モニターにその言葉が現われた瞬間、画面越しに見える地面に黄色い矢印が映し出された。それは扉を指し示している。

「おいおい、いろいろと能力取得しすぎじゃないのか？ そのうち武装関係以外で拡張領域使い切るんじゃないだろうな」

ISには拡張領域というものが存在する。生まれたばかりのISには武装が存在せず、基本的にはそれに武装や機能を後付するわけだ。一般に多く普及されている『第二代』はそこにあらゆる戦闘状況を想定した武装を入れ込んでいる。そのため、武器を切り替えたり、パーツを換装したりと自由度が高い。

一方、セシリア・オルコットの使っていたブルーティアーズは『第三代』。操縦者のイメージインターフェイスを用いた特殊機。その機体は一つの分野に特化していることが多い。

特化した部分にほとんどの領域を使用できるため、かなり強力な武装を用意できる。オルコットのビットのように。

そのかわり、あまりに強力なもののため、操縦者を選ぶし、燃費が悪いなど、実験機の意味合いが強い。

では、一夏のISは第何世代か？

武装を除いた部分で考えるならば、第三世代にあたる。『飛行』に特化した機体。そのため、極限まで装甲をなくし、スラスターの数が多く、瞬間的な加速度は今までのISの常識を覆すレベルだ。

対して武装は流体装甲と進化因子で完全にまかなえてしまう。

そのかわり拡張領域の使用量はかなり大きい。今は、ブルーティアーズから手に入れたビット機能しかないが、今後どんどん進化していく。それにともない設計図が増えていくわけだ。それこそ一つのISのコアではまかなえないぐらいにまで。

それなのにこのISは勝手に知識を手に入れて、どんどん機能を手に入れている。ジャミング、自動操縦などなど。無駄な機能をつけすぎて拡張領域がパンクするなんてアホすぎる。

問題ナシ

「まあ、問題ないだろうとは思ってたがよ。それじゃ、行きま
すかね」

矢印を追いかけるような形でドアへと足を進める。

ドアの目の前で止まると空気が抜けるような音がして静かに扉がスライドした。そこから見えるのは細い通路。一步通路に出ると、扉は静かに閉じた。矢印はそのまま入り組んだ通路をまっすぐ進んでいく。

まるで、工場見学のような軽い足取りで一夏は進んでいく。

そもそも潜水艦といったものに乗ったことなどほとんどないのだからそれも当然の話だろう。

なにより

「いいねえ。無駄に洗練されていない無骨な感じ。かなりテンション
が上がるわあ」

きらきらと瞳を輝かせ、通路に奔る剥き出しのパイプや壁の形状を
観察しながら無邪気に笑っている。たしかに使われている素材や技

術は最先端のものなのだろうが、それでもなお硬さというか鋭さのようなものを感じる。

そのまままっすぐ通路を歩いていると、広場のような場所に出た。とはいっても3機のエレベーターが設置されているだけのエレベーターホールなのだが。

それを見た一夏は眉をしかめ、げんなりしている。

本来、潜水艦にはこんなものは存在しない。浮上・潜行を繰り返す上、もし攻撃された際に使用不可能な状況になるかもしれないからだ。

普通に考えれば階段なのだが、エレベーターがあるというのはかなり奇妙な光景だった。

一夏は大きく息を吐いて、

「納得いかなえなあ。さつきまでかなりテンション上がったけど、これ見ちまうと幻滅だわ。

やっぱ、行き過ぎた科学ってのは様式美ってのをなくすな」

醜悪。 地下3階、支局長室

「はいはい。てか、お前も行き過ぎた科学だよな」

エレベーターのボタンを押すと、すぐさま扉が開いた。そのまま乗り込み、目的地のボタンを押す。扉が閉まると、ゆっくりとしたスピードで下へと進んでいく。

『ひとり』と『ひとつ』の会話。出会ってまだ、半日も経っていない。けれども、どこか親友のような悪友のような親しみを感じる。

たわいのないことを言いながらも、一夏の心の内は言いようのない感情が渦を巻いていた。

期待とは違う、ここからなにかが始まるかもしれないという高揚に

近いナニカ。

そんな一夏の内心をまったく気にせずエレベーターは目的の階へと到着するとチンツと電子音を立ててドアを開けた。

「やっぱり、エレベーターはダメだな。合わなさすぎる……」

同意……

エレベーターを降りた一夏の前には重厚な扉があった。

生体反応、1アリ

「ここからだ。ここから俺（桐生一夏）がはじまる」

ノブを掴み、軽く手前に引くと、ゆっくりと扉が開いていく。

自分の手にかかる重さがこれからの自分にかかる責任の重大さのよう
うに、一夏は感じていた。

「はじめまして、というべきかな。桐生一夏君」

薄暗い室内の奥には社長室にありそうな高級感ある机。

その奥の椅子に男がひとり座っていた。くすんだ金髪をボサボサに伸ばしダラリと下ろした40代ぐらいの男性だった。よれよれの白衣を身に纏い、なかに着ているシャツもどこか薄汚れている。どうも、科学者というものは総じて研究以外には無頓着らしい。けれど、彼の蒼い瞳には鋭さがあり、強い光を放っていた。そのちぐはぐさが、一夏にはとても興味深いものだった。

「俺の自己紹介は必要ないだろうがよ。あんたの名前を教えてください」

えるか？」

「夏がそう言うと、男は「そうだったな」と咳払いを一つすると、

「わたしは、『亡国企業』IS部門、第9支局、第9支局・支局長をしている。名前はそうだな……ドクターとでも呼んでくれたまえ」

カラカラと男は笑みを浮かべた。

第九話『海の底にて』（後書き）

はてさて、ようやく『亡国企業』との邂逅です。
てか、亡国企業の字ってコレで合ってるのか不安……

ここからはけっこうオリジナル展開も織り交ぜつつ原作を進めていきます。少しずつ『龍が如く』のキャラも登場させるつもりです。
誰を出すかは秘密ということで。

今のところ、ヒロインらしいヒロインは考えていません。てか、正直この作品に愛など恋など不要ッ！！とか考えてしまったわけで……
少なくとも、恋愛要素を入れるにしても、ハーレムには絶対にならないつもりです。

ではでは、またいつかお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2799t/>

IS ~ 『桐生』の名を継ぐものよ

2011年11月24日00時47分発行